Yokohama mArtLife

ヨコハマートライフ・芸術創造特別支援事業

報告書

2020年3月

横浜市、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

目次

要約｜YokohamArtLifeで実現できたこと……3-5

1 YokohamArtLifeとは……6-10

1-1 今回の制度の特徴 …… 7
1-2 公募時の仮説 …… 8
1-3 場の設定／地域ランドマークの活用 … 9
1-4 チームビルディングとコミュニケーション 10

2 成果測定の設計 ……11-16

2-1 公募要項における案……12
2-2 決定した指標一覧（1/2）共通指標…13
2-3 決定した指標一覧（2/2）個別指標…14
2-4 アンケートによる情報収集の方法 ……15
2-5 分析方法 ……16

3 成果測定の結果……17-57

3-1 全体の結果……17-20
3-2 各団体からの報告 ……21-57

4 今後の展望・提言 ……58-60

©YokohamArtLife

要約1　YokohamArtLifeで実現できたこと

・事業開催区は市内8区に渡り、多くの市民が参加しました。

・参加者・鑑賞者へのアンケートの結果、普段芸術文化活動に参加していないと答えた人は約3割となり、事業体験後、今後芸術文化活動に参加する機会を増やしたいと思った人は約8割となりました。

参加者数

4905名

実施地域

開催8区

保土ケ谷区
緑区
鶴見区
旭区（左近山含む）
西区（みなとみらい）
中区
磯子区
金沢区

普段芸術文化に触れていない割合*1

31%

回答数：433名（内、無回答23名）

今後芸術文化に触れる機会を増やしたいと思った割合*2

〈全体〉

75%

回答数：433名（内、無回答27名）

〈普段触れていない人〉

67%

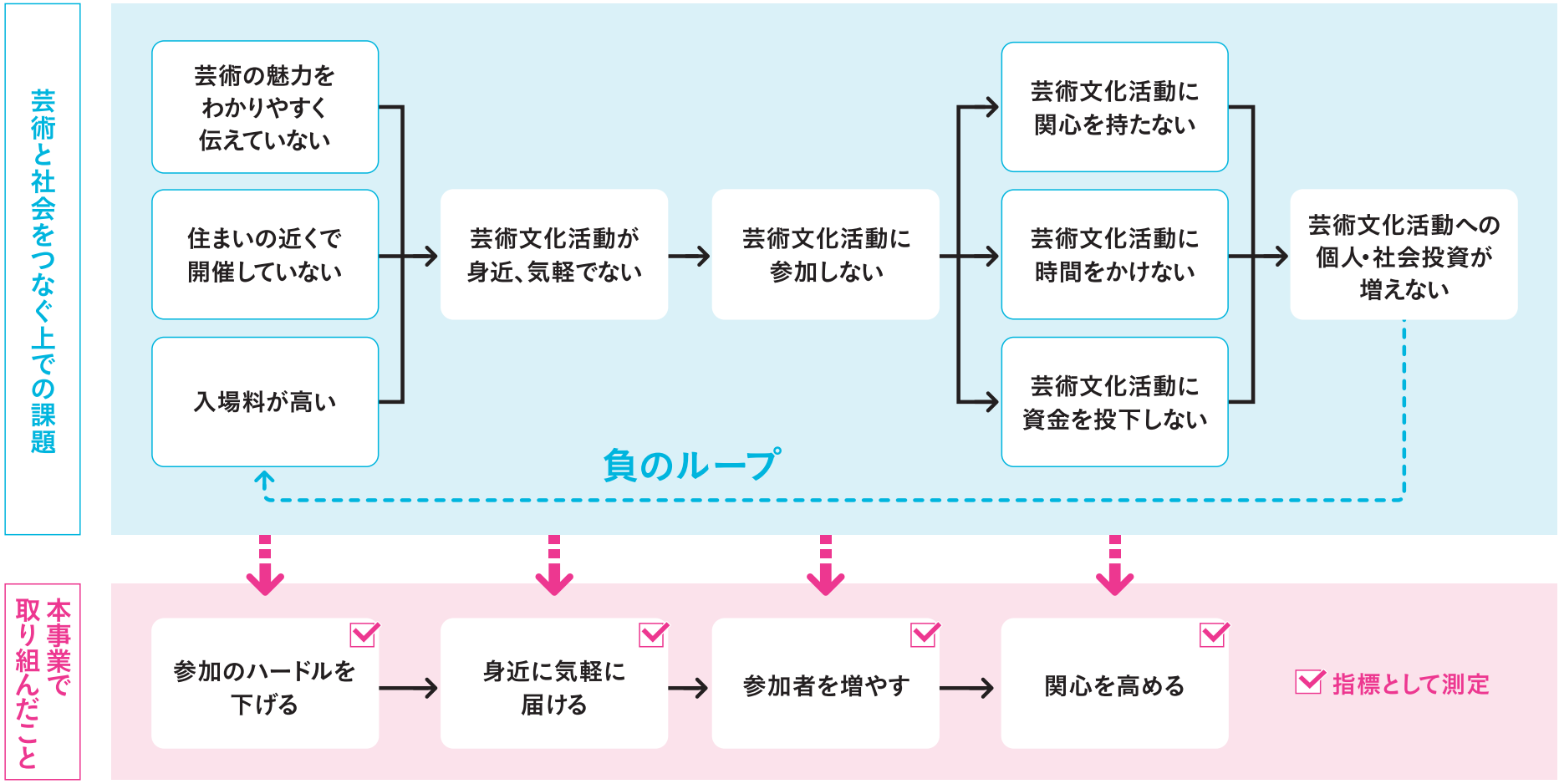
回答数：134名

*1：芸術文化活動の機会の利用が年に1回以下の割合　*2：今後の参加意向でそう思う、少しそう思うと回答した割合

©YokohamArtLife

要約2　YokohamArtLifeで実現できたこと

・芸術文化の支援制度の課題解決に取り組みました。



©YokohamArtLife

要約3　YokohamArtLifeで実現できたこと

・横浜市各区には、横浜ならではの環境の魅力があり、独自の表現や風景を生み出せる可能性に溢れています。そのことがプログラムの実施により顕在化し、相互作用を生む人の交流が場の価値を気づかせてくれました。

・地域は公園や広場などの公共空間やランドマークとなる建物等、都市空間が豊かです。そこに芸術文化プログラムを導入することで、住民にとっての共有地（コモンズ）の価値が高まり、地域の変化を促すことが示されました。そのことが、社会や地域の一環に芸術文化があることの価値へと繋がっています。

表現のために広場を開き、地域の未来を予感させる風景に

旭区 左近山アートフェスティバル！（撮影：STGK Inc.）

いつもの風景にアートが加わり、心の中の風景も変わる

金沢区 飯川雄大《デコレータークラブ-ピンクの猫の小林さん-》2020年（撮影：阪中隆文）

©YokohamArtLife

1 YokohamArtLifeとは

背景と公募概要

■趣旨

横浜市と公益財団法人横浜市芸術文化振興財団は、2019年、2020年と国際的なスポーツ大会が横浜市内で開催されることを契機として、芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム「YokohamArtLife（ヨコハマートライフ）」を実施。
多くの人が距離や時間、気持ちなどを理由に少し遠くに感じる“芸術文化”。そこで、YokohamArtLife（ヨコハマートライフ）」では採択活動を通じて、もっと身近に、もっと気軽に触れられる芸術文化体験を市内で増やしていくことを実現し、芸術文化活動を社会に広げることを目的とします。

■公募概要

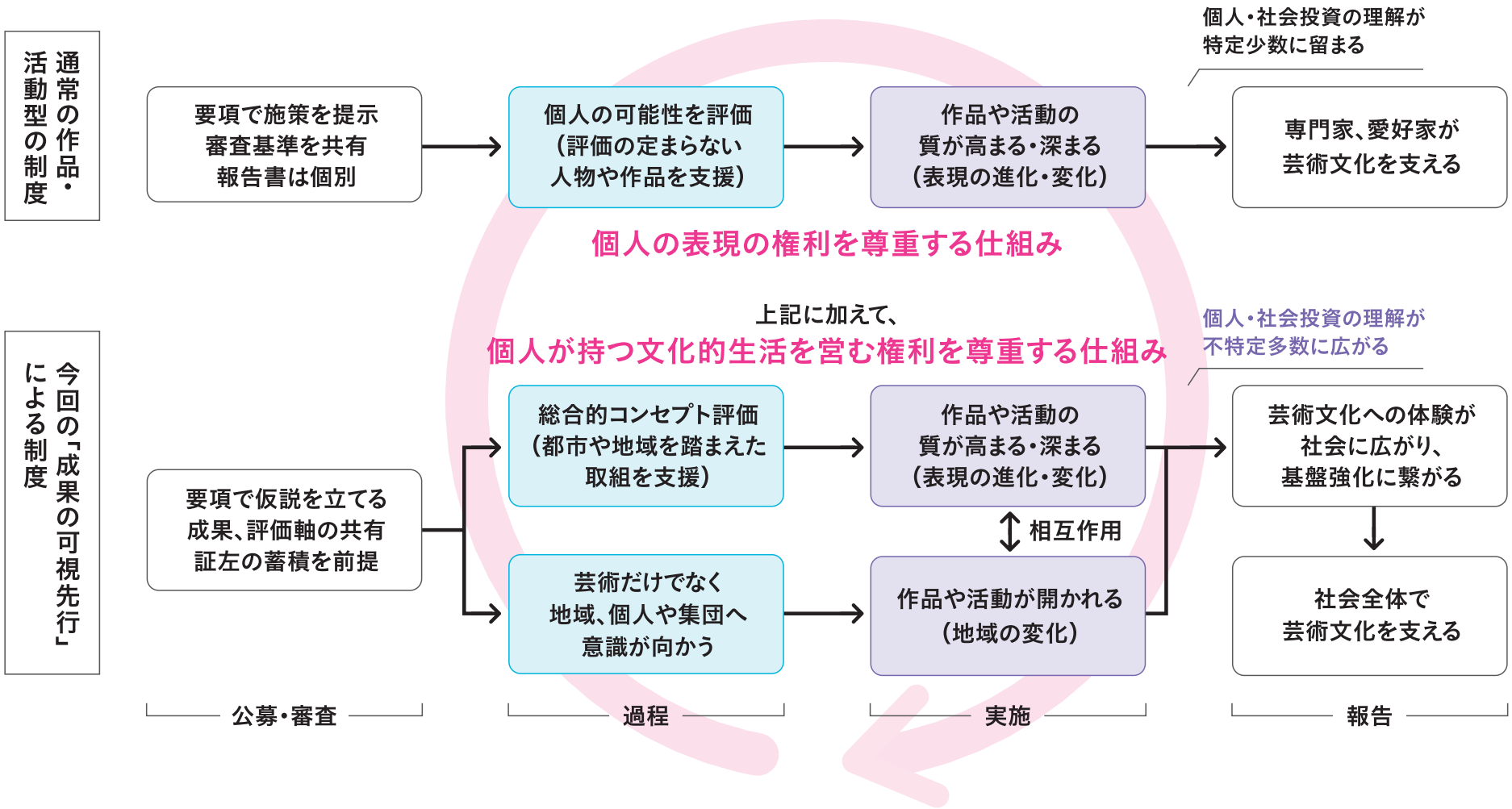
対象	横浜ならではの芸術文化体験を生み出すプロジェクトであり、特に先進的、もしくは将来的に地域への定着を狙った実験的なプロジェクトを支援。地域の方々に芸術文化体験を提供する内容であることが必須。 プロジェクトの内容、形態は自由。法人、または法人が代表となる実行委員会（実施（申請）法人の所在地は、市内・市外を問わない）。
提案内容	多様化する社会の中で、あらゆる市民が芸術文化活動に参加できるようにしていくための戦略的なプロジェクト。 ①「何かしらの理由で芸術文化に触れたくても触れることが難しい人」、②「芸術文化に関心がなく芸術文化に触れていない人」がいることを想定し、その方々に芸術文化に触れやすい環境の形成（会場、料金、内容等）、また、情報発信方法や多様な参加動機を生み出す工夫が求められる。また、本支援事業（リーディング・プログラム）の目的が、中期的な地域の変化を目指したものであるため、原則2年以上の継続を見据えたプロジェクトであること。
想定会場	横浜市内の都心部や郊外部にある文化施設や広場、公園、学校、歴史的建造物等、 地域に住む方の身近に存在する地域ランドマーク*を実施会場として想定している。
実施期間	2019年9月1日～2020年1月31日までに開催されるプロジェクトであること。
開催支援額	開催経費の支援として提案内容により、最高2,000万円までの資金支援を行う。 申請額は最低500万円から最高2,000万円までの間で提案すること。

＊地域ランドマークとは：地域の人が愛着を持ち、誇りに感じ、多様性を包摂する場のこと。具体的には、屋外公共空間（広場、公園等）、屋内公共施設（文化施設、学校、病院等）、商店街、歴史的建造物など。

©YokohamArtLife

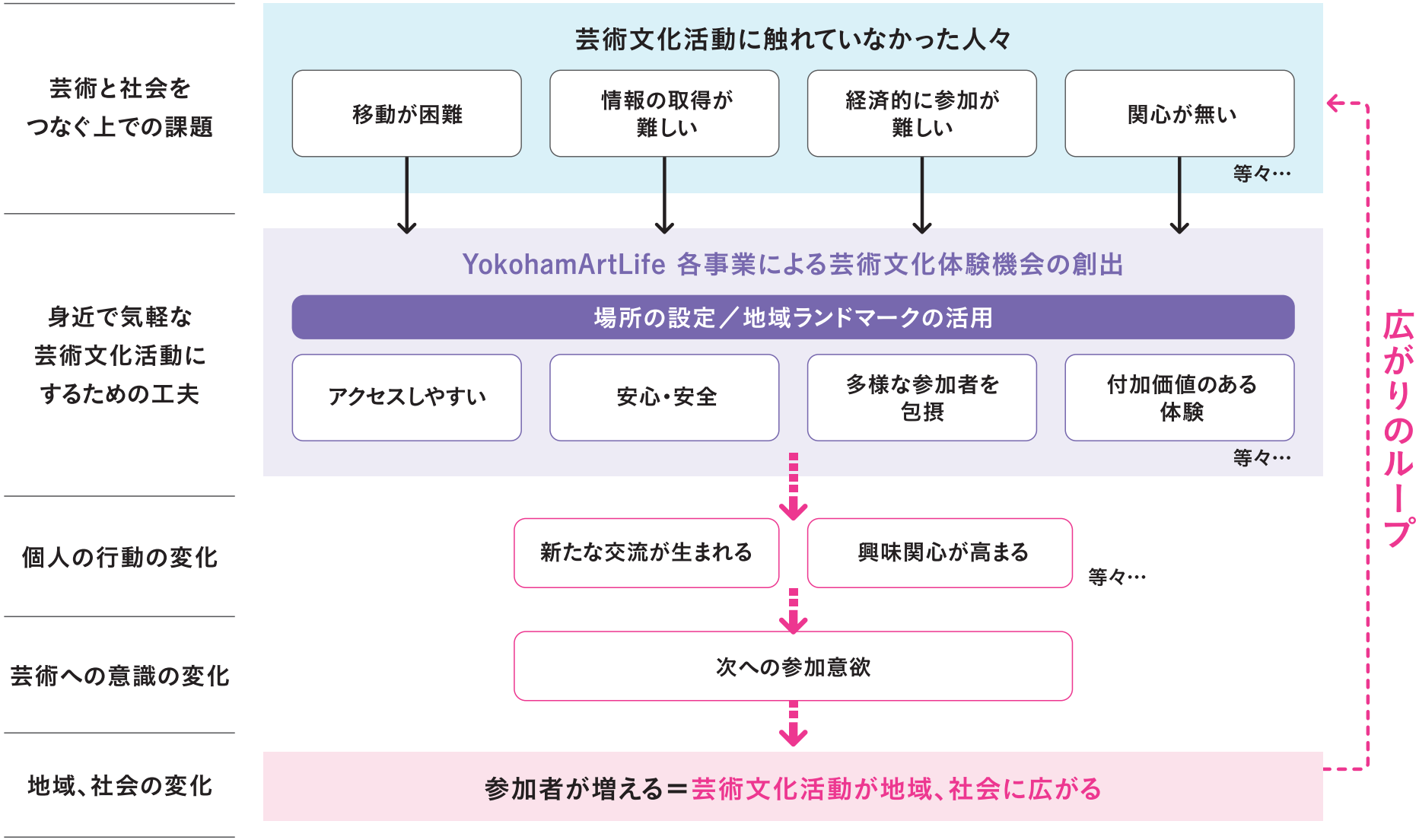
今回の制度の特徴 ～成果の可視先行、対話がもたらす公共性

・募集側は公募・審査段階で「成果の可視先行」でパートナー（実践者／実施団体）に企画の意図、仮説や指標を詳細に提案。採択後の過程段階で「評価をツールとした対話の重視と証左の積み上げ」を行うことで公共性を高めました。結果、目的や目標が異なるもの同士を包摂し、現場レベルでは臨機応変な対応を可能にし、活動の質と量が向上。このように社会全体で芸術文化活動を支援していく流れをつくります。



©YokohamArtLife

公募時の仮説



©YokohamArtLife

場の設定／地域ランドマークの活用

〈場の価値創造のフレームワーク〉

提供する場の属性・サービスの特徴

合理的属性

- 場所
  - ・立地　・空間と設備
- プロジェクト
  - ・芸術の集積・質
  - ・付加価値サービス

情緒的価値

- 安心・安全
- 新鮮
- 包摂
- フラット
- 元気

合理的便益

- 移動の優位性がある
- 毎回安定・安心のサービス
- 友達を誘いやすい
- 主体的行動を起こしやすい
- コミュニティ情報の取得

情緒的便益

- ステータス
- 信用
- 高感度
- 誇り・帰属感
- 居心地が良い
- 周囲との繋がり

参加者が受け取る価値・便益

〈公共空間における場の確認項目〉

合理的属性

- 立地
  - ☑ アクセスしやすい場か
- 空間と設備
  - ☑ 多くの人数を定期的に収容可能な場か
- 芸術の集積・質
  - ☑ 芸術活動の実績はあるか
- 付加価値サービス
  - ☑ 対象にとって付加価値のあるサービスがあるか

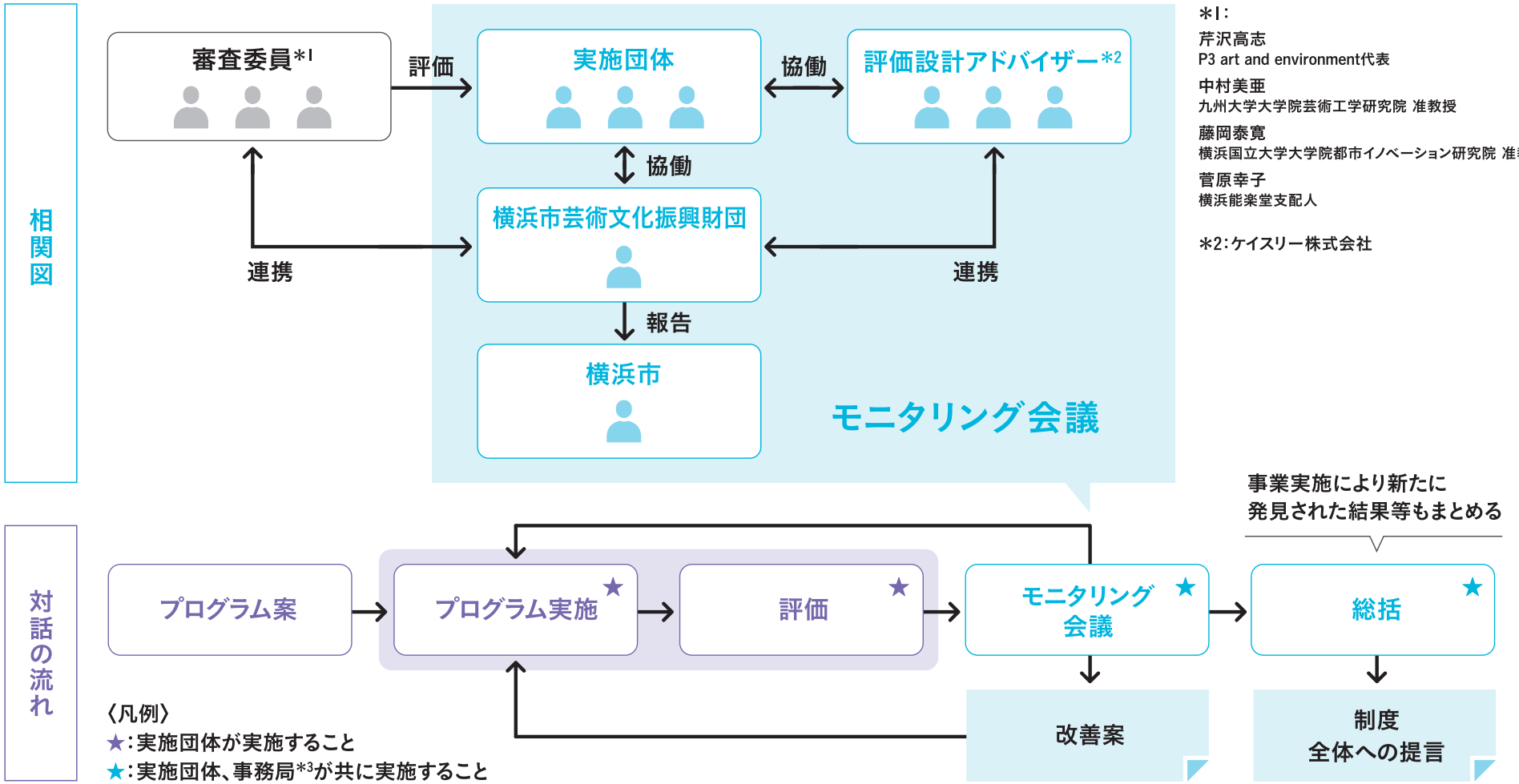
情緒的価値

- ☑ 安心・安全な場所のための工夫があるか
- ☑ 新鮮さがあるか
- ☑ 多様な参加者を包摂する工夫があるか

©YokohamArtLife

チームビルディングとコミュニケーション

・評価を対話のツールとし、その対話を通じて紋切型の役割を超えたコミュニケーションの構築を目指して。



*1:
芹沢高志
P3 art and environment代表
中村美亜
九州大学大学院芸術工学研究院 准教授
藤岡泰寛
横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 准教授
菅原幸子
横浜能楽堂支配人

*2:ケイスリー株式会社

*3:事務局 横浜市芸術文化振興財団と評価設計アドバイザー ケイスリー㈱のこと。

©YokohamArtLife

2 成果測定の設計

・制度全体の成果を可視化するために全事業の共通指標を設定し、事業毎の可視化のために事業に応じた個別指標を設定しました。

・事務局側と実施団体（以下、団体）が、成果をあらかじめ共有し、共通のコミュニケーションをはかるために、事務局側と各団体と議論しながら共通指標・個別指標の設計をしました。

団体間共通指標・団体毎個別指標の作成プロセス	公募時仕様書における案	詳細案の作成	第1回モニタリング会議	再検討・修正	第2回モニタリング会議
事務局 （・横浜市芸術文化振興財団 ・評価設計アドバイザー（ケイスリー㈱））	協議による作成	協議による作成	議論 採択団体からの意見集約	協議による再検討・修正	議論 採択団体との確認・決定
実施団体					

©YokohamArtLife

公募要項における案

・公募要項では共通指標、個別指標をそれぞれ、①計画の構造、②成果に向けた過程、③成果の指標の3指標で事業を把握することにしていました。

	指標の種類	指標	測定時期
共通指標に該当	計画の構造	地域ランドマークの場の特徴を確認	毎プロジェクト実施時 最終集計
	成果に向けた過程	・プロジェクト実施回数（日数） ・プロジェクト参加者・来場者数	
		プロジェクト参加者の地域への認識（満足度・誇り）のアンケート	
共通指標および個別指標に該当	成果の指標	・あらゆる市民に芸術文化体験の機会を創出するための指標の設定 ・指標の数は最低1項目から最大3項目	毎プロジェクト実施時 最終集計

©YokohamArtLife

決定した指標一覧（1/2）共通指標

・第1回モニタリング会議で各団体と議論した結果、「参加者の属性に関する指標」と「参加者の変化に関する指標」によって事業の成果を把握することにしました。

・比較するためのベースラインのデータが不十分であることから今年度は指標に対する目標値は定めていません。

指標の種類	指標	測定時期
参加者の属性に関する指標	①*年齢 ②住まい ③職業 ④参加人数 ⑤グループ属性 ⑥開催場所への来場頻度 ⑦来場理由 ⑧認知経路 ⑨芸術文化に触れる機会の充実度 ⑩芸術文化に触れる頻度	毎プロジェクト実施時 最終集計
参加者の成果に関する指標	⑫芸術文化の今後の鑑賞・参加意向 ⑬プログラムの満足度 ⑭新しい交流機会になったか	毎プロジェクト実施時 最終集計

＊各指標の番号は、3-1（17p）に提示する実際の質問項目と対応しています。

©YokohamArtLife

決定した指標一覧（2/2）個別指標

・各団体が特に聞きたい個別指標の設計を行いました。

ザ・ダークルーム・インターナショナル	①日頃の写真との関わりについて ②ワークショップに参加してものの見方が変化したか ③同様イベントへの参加意向
ヒューマンフェローシップ	来場者　①活動の認知　②今後の活動の応援 参加者　・対人関係や自己実現に関して、20項目程度
スタジオゲンクマガイ（左近山アトリエ131110）	以下の項目についてインタビュー ・日頃芸術文化に触れることやその機会について ・プログラムの具体的な感想
YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会	・個別指標は設定していない

©YokohamArtLife

アンケートによる情報収集の方法

・以下の手順で各団体がアンケートによる情報収集を行いました。

アンケート用紙の作成	■13p、14pの手順で設計した共通指標と各団体の設計した個別指標を合わせたアンケート用紙を各団体ごとに作成。
アンケートの実施	■作成したアンケート用紙は、各団体が事業実施日に参加者、観覧者、見学者等に配布、またはインタビューによって情報収集を実施。
データの入力・集積	■収集した情報は、次ページ2-5「分析方法」にある分析表に、各団体が入力し、情報を集積。

■個別指標がインタビューになっている団体については、共通指標のアンケートを実施するとともに、団体のスタッフがインタビューを実施しました。
■インタビューについては、ケイスリー㈱に現地でアドバイスを頂き、団体スタッフが任意の時に行いました。
■参加人数の多いイベントの場合は、アンケート調査人員を配置しました。

©YokohamArtLife

分析方法

・共通の分析表（エクセル）を作成し、それをもとにYokohamArtLife全体の分析は事務局が行い、個別事業の分析は各団体が行いました。

分析表の作成	■簡易分析が可能な分析表を作成。 ・回答の集計結果　・項目ごとのグラフ化　・関連した質問項目の相関関係
全体／個別入力	■それぞれの事業で取得したアンケート結果やインタビュー内容を分析表に入力。
全体／個別分析	■アンケートやインタビューの情報入力によって作成された簡易な分析やグラフから、各団体の事業の概要と共通指標に沿った成果を分析。 ■YokohamArtLife事業全体の成果の分析。
振り返り	■分析結果を基に、YokohamArtLife全体と個別事業の振り返りを行いました。

©YokohamArtLife

全体の結果

・実際に実施した共通指標を測定するためのアンケート項目は、以下の通りです。

	質問項目	対応する共通指標
1	あなたの年齢を教えてください。	①年齢
2	あなたのお住まいを教えてください。	②住まい
3	あなたのご職業を教えてください。	③職業
4	本日は何人で参加されましたか。	④参加人数
5	【4】で2人以上を選択された方。本日はどなたと参加されましたか。	⑤グループ属性
6	本プログラム開催地には、普段からよく来られますか。	⑥来場頻度
7	どのような理由でここに来られましたか。	⑦来場理由
8	本プログラムをご存知だった方にうかがいます。このイベントについて、どこで情報を知りましたか。	⑧認知経路
9	日頃、身近な地域において、音楽・演劇・美術などの芸術文化を鑑賞したり参加したりする機会・場が充実していると思いますか。	⑨機会の充実
10	日頃、どのくらいの頻度で音楽・演劇・美術などの芸術文化を鑑賞したり参加したりしますか。	⑩機会の利用
12	本プログラムに参加し、今後音楽・演劇・美術などの芸術文化の鑑賞・参加を始めたい、もしくは増やしたいと思いましたか。	⑫今後の参加意向
13	本プログラムに満足していただけましたでしょうか。	⑬満足度
14	本プログラムへの参加は、新しく出会う人との新たな交流の機会になりましたか。	⑭新しい交流機会

※⑪は自由記述の項目のため記載していません。

■これ以降の本報告書のグラフと考察は、上記質問項目によるアンケートを実施し、得られた回答を2-5分析方法（16p）で触れた分析表に各団体が入力し、統計的な集計を行った結果を反映したものです。

■各グラフの番号は、共通指標の番号と対応しており、母数に関しては（n＝○○）の形で表示しています。

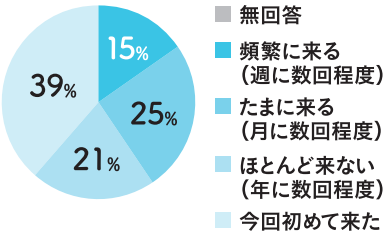
■「参加者の声」や「自由記述」と書かれた部分については、アンケート用紙の自由記述の項目とインタビューにお寄せいただいた参加者のご意見を、適宜抜粋して掲出しました。

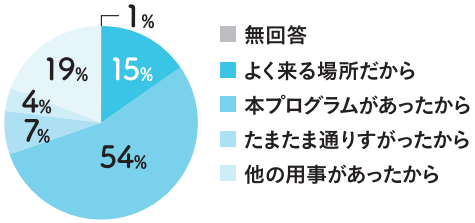
©YokohamArtLife

全体の結果

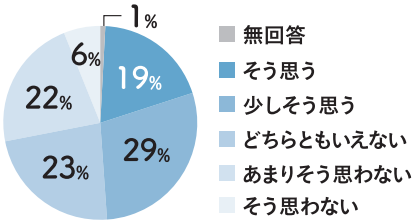
・共通指標を4団体でまとめ、分析した結果を下に示す。(n＝433)

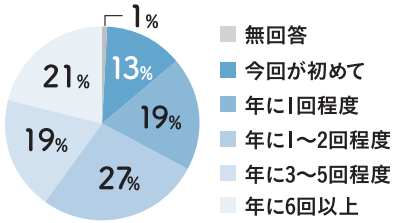
開催場所の⑥来場頻度と⑦来場理由





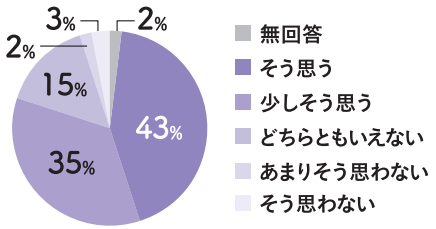
芸術文化に関する⑨機会の充実と⑩機会の利用



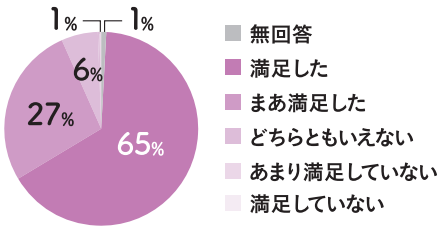


満足度、今後の参加意向

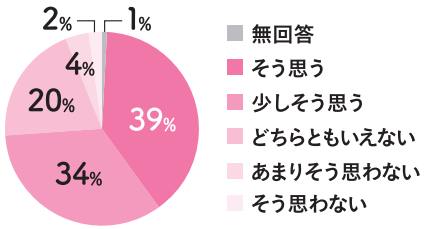
⑫今後の参加意向



⑬満足度



⑭新しい交流機会



考察

来場した人の内、「ほとんど来ない」「今回初めて来た」人は60%となり、来場理由としては「本プログラムがあったから」が54%でした。また、機会が少ないと考える人が51%、機会の利用も「今回が初めて」から「年に1~2回程度」と回答した人が59%になったことから、普段芸術文化活動に触れる機会が充実していない人が、本プログラムを目的に開催場所を訪れたことがわかります。また、プログラムの満足度は92%、今後の参加意向では78%、新たな交流機会は73%であったことから、参加者の多くは本プログラムに満足し、今後芸術文化に積極的に参加したいと思うようになった、と言えます。

©YokohamArtLife

全体の結果 ～参加者の声

・各プログラムに寄せられた参加者の声の中には、今後はより告知が広くあった方が良い、家族で来やすい体験型のプログラムなどを希望する声が複数ありました。

普段、芸術文化に触れる機会が少ないと感じる理由

- 子連れで参加できるプログラムが少ない
- 興味があるが不便な場所だと参加できない
- 情報が届かず気付かない
- 敷居が高く感じる為、気軽に行きにくい
- 二俣川まで出れば小さなホールがあるが映画館が無い
- どちらかというと都内や横浜の中心部での開催が多く、身近なエリアでは少なめ
- 病院通いのため
- みなとみらい周辺ではよく見かける
- 横浜市では手頃なイベントが少ない様に感じる
- 今は足腰が弱ってしまったため行きたくても行けない
- 値段と時間が合わない

今回のプログラムが良かったという声

- 子供が楽しそうに工作をしていたのが良かった
- コストパフォーマンスがとても良い
- 地域に根差したアートフェスティバルが始まったことはとてもうれしい
- 空間がアットホームで、いつも居心地抜群
- 家で一人いる事が多いので外出する機会になった
- 住民の方と、アーティストの方が同じ場でイベントしていることが、まずすばらしい!
- 話す人が個人的に増えた
- 参加型のイベントだったので一体感があった
- 家族で来ても楽しくて、素晴らしい
- まちづくりの経緯を知れる機会となった

地域ランドマークが機能していたと考えられる声

- 地域でこのようなイベントがあって楽しめた
- (イベントには通りすがりで参加)地域のイベントで芸術活動に参加する機会が多い
- 場所的に参加しやすい
- 地域の方々がたくさん出店していてとても身近に感じてよかった
- 身近な場所で良い催しがあり興味が湧きました
- (公園で開催しており)会場の雰囲気が良い!
- 地域に愛されている空気が伝わってきて、とても素敵なプログラムと作品だと思った

©YokohamArtLife

全体の結果 ～特筆すべき自由記述等

来場者：若者たちの生き生きとして、
堂々とパフォーマンスをしている
姿を見て感動しました。

参加者：ミュージカルを通じて
色々な話題がうまれたり
なかよくなれたので良かった。

（ヒューマンフェローシップ）

家で一人いる事が多いので
外出する機会になった。
いろんな人と話をする
機会になって良かった。
（左近山アトリエ131110）

プロの方に身近に教えて頂く
貴重な機会を頂くことが出来ました。
夫婦それぞれの新しい魅力に
気付くことが出来たような気がします。
（ザ・ダークルーム・インターナショナル）

「金沢区とみなとみらい」
みなとみらいが作られた
流れや、コンセプトなど、
普段かよっているだけでは
わからない様々な
計画や考えを学べました。
とても楽しかったです。
（BankART school 出張編）

子供から高齢者まで
幅広い年齢層が楽しんで
参加していてとてもGoodです。
出店者のクオリティも高く、
とてもイゴコチの良い空間と
時間を過ごすことが出来ました!
（左近山アートフェスティバル!）

猫の小林さんを作ることで
盆栽に対してもより愛着が出てきました。
一年間楽しみながら頑張りたいと思います。
（猫の小林さんの庭づくりWS）

子供と一緒に参加させて頂き、
子供でも分かるようにやさしく教えてくださり、
二人でまた来たいと思っています。
とても楽しかったです。
（ザ・ダークルーム・インターナショナル）

©YokohamArtLife

各団体からの報告1　ザ・ダークルーム・インターナショナル

■開催概要

「移動型! ダークルーム!」
PHOTO CABINワークショップの実施（全12回開催）

■実施会場

①神奈川県立保土ケ谷公園（保土ケ谷区）11/4、11/17、12/8、1/21
②神奈川県立四季の森公園（緑区）…… 12/1、12/14、1/11、1/25
③神奈川県立三ツ池公園（鶴見区）…… 12/7、12/15、1/12
④左近山団地みんなのにわ（旭区）…… 11/30

■実施プログラム

A カメラ・オブスキュラ体験・制作
B 撮る・撮られる! カメラマン・モデル体験
C ピンホールカメラ・暗室体験
D フィルム撮影・暗室体験

↑「移動型! ダークルーム!」開催チラシ

©YokohamArtLife

各団体からの報告1　ザ・ダークルーム・インターナショナル

■団体概要

特定非営利活動法人ザ・ダークルーム・インターナショナルは、1999年に横浜市中区山下町で日本初の本格的モノクロレンタル暗室「THE DARKROOM」としてスタートし、2004年に特定非営利活動法人格を取得しました。写真文化発祥の地・横浜で、写真専門のNPO法人として、レンタル暗室の運営の傍ら様々なイベント企画やワークショップを実施している。写真をコミュニケーションツールとして、横浜を中心として様々な人と地域、文化を繋いでいくためのプラットフォームであり続けることを目指しています。

■事業目的

多様化する社会の中で、フィルム・デジタルカメラ、スマホとSNSに至るまで様々な様態で表現の手段として私たちの日常生活に入り込んでいます。しかしながら、それらはオンラインでのやり取りが増えていく一方で、リアルに触れる機会は限られてきている現状です。そこで私達は、移動暗室事業を通じて写真に触れる機会を様々なリアルの場にデリバリーすることで、写真を通した人や地域とのコミュニケーションを生み出し、アートを日常生活に取り入れる人を増やしていく事を目指します。

■実施場所の設定理由

物理的・心理的な理由により芸術文化活動の活発な都心部にアクセスすることが困難な方が一定数いると想定し、より日常生活の範囲にリーチしていくため、市内郊外区の比較的大きな複数の公園を開催場所として設定しました。

■対象者の設定理由

カメラが身近な世代で、かつ仕事をリタイアして時間に比較的余裕があるものの、仲間の存在やフットワークなどの理由により写真に触れる機会が少ないと思われるシニア層。また主に12歳以下の子供を抱え、都心部まで出かけてアートに触れる時間をつくることが比較的に少ないと思われる子育て世代を本事業の主な対象者として設定しました。

■実施形式の設定理由

対象者が、より興味を持ちやすく、より多くの方に触れて頂くために、ワークショップだけでなく作品展示も同時に行うことで参加のハードルを下げる工夫をした。またワークショップも、興味のあるものに主体的に参加できるように複数のプログラムを設けるようにしました。

©YokohamArtLife

各団体からの報告1　ザ・ダークルーム・インターナショナル

参加者数

471名

実施地域

市内4区で開催

（参加者数内訳）

保土ケ谷区	189名
緑区	51名
鶴見区	83名
旭区	146名
中止のフォローアップ	2名

普段芸術文化活動に参加していない割合*1

27%

回答数：45名（内、無回答2名）

今後芸術文化活動に参加する機会を増やしたいと思った割合*2

〈全体〉

80%

回答数：45名（内、無回答2名）

〈普段触れていない人〉

50%

回答数：12名

*1：芸術文化活動の機会の利用が年に1回以下の割合
*2：*1の回答者のうち、今後の参加意向でそう思う、少しそう思うと回答した割合

©YokohamArtLife

各団体からの報告1　ザ・ダークルーム・インターナショナル

PHOTO CABIN
@四季の森公園

いつもの公園に見慣れない車
「PHOTO CABIN」が登場

カメラ・オブスキュラ体験
@左近山みんなのにわ

PHOTO CABINに乗り込むと
外の景色がさかさまに見える

カメラ・オブスキュラ制作
@保土ケ谷公園

親子で協力して
制作キットを手作り

カメラ・オブスキュラ制作
@三ツ池公園

デコレーションをして
Myカメラ・オブスキュラに

カメラ・オブスキュラ制作
@保土ケ谷公園

Myカメラ・オブスキュラを
覗き込んでカメラの原理を理解

カメラ・オブスキュラ制作
@三ツ池公園

カメラ・オブスキュラで
いつもの景色が違って見える

カメラマン・モデル体験
@三ツ池公園

多機能なPHOTO CABINは
屋外写真スタジオにもなる

カメラマン・モデル体験
@保土ケ谷公園

撮影技術を学ぶ目的で参加した
シニア男性もモデル体験

©YokohamArtLife

各団体からの報告1　ザ・ダークルーム・インターナショナル

カメラマン・モデル体験
@保土ケ谷公園

カップルは普段と違う相手の
魅力に気付けたという声も

カメラマン・モデル体験
@三ッ池公園

予約いただいたシニア男性は
孫とのコミュニケーションに

カメラマン・モデル体験
@四季の森公園

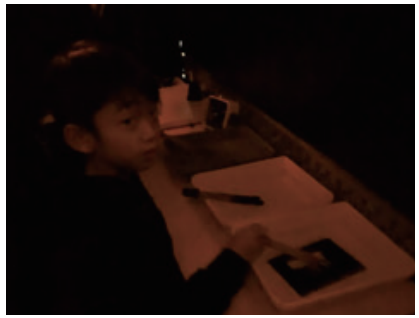
親が旅行中の子供達(孫)と
一緒に思い出の一枚に

ピンホールカメラ・暗室体験
@保土ケ谷公園

1枚の撮影で30秒間じっとして
いることが新鮮な体験

ピンホールカメラ・暗室体験
@保土ケ谷公園

暗室作業は、薬品の中で像が
浮かんでくる時が感動体験



ピンホールカメラ・暗室体験
@保土ケ谷公園

スマホが当たり前だからこそ、
写真が出来る過程にワクワク

フイルム撮影・暗室体験
@THE DARKROOM

写真が趣味のお父さんと子供で
初めてのフィルム現像

フイルム撮影・暗室体験
@THE DARKROOM

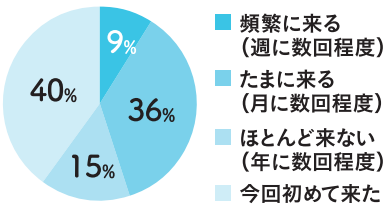
スマホ写真の加工アプリの世界を
暗室作業で体験できる

©YokohamArtLife

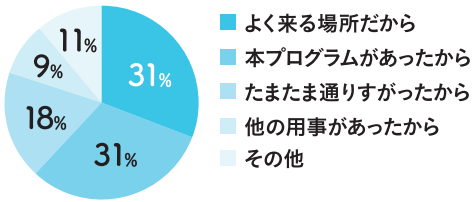
各団体からの報告1　ザ・ダークルーム・インターナショナル

開催場所の来場頻度と来場理由（n＝45）

⑥普段の来場頻度

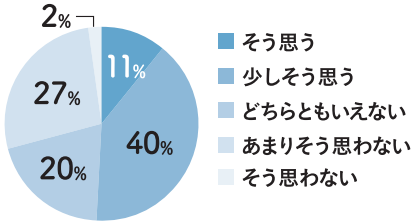


⑦来場理由

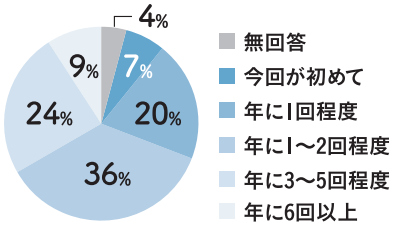


芸術文化に関する機会の充実と利用頻度（n＝45）

⑨機会の充実

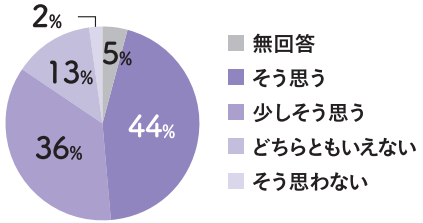


⑩機会の利用

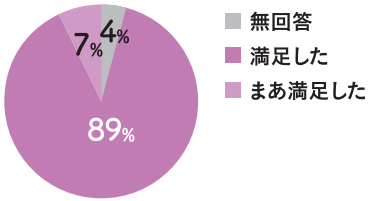


満足度、今後の参加意向（n＝45）

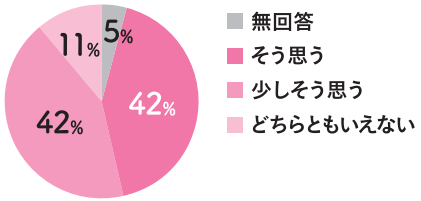
⑫今後の参加意向



⑬満足度



⑭新しい交流機会



考察

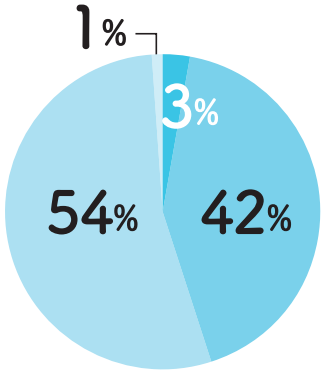
来場した人の内、「頻繁に来る」「たまに来る」人は45%、「たまたま通りすがった」「他の用事があった」が27%で、機会の充実が肯定的でない人が49%、機会の利用も「今回が初めて」～「年に1~2回程度」が63%を占める。そのため、普段芸術文化活動に触れる機会が充実していない人が、たまたま本プログラムに出会った可能性が一定あると言える。また、プログラムに関して、肯定的な回答が今後の参加意向では80%、満足度は96%、交流機会は84%であり、参加者の多くは本プログラムに満足し、今後芸術文化の機会により参加する意向が強まったと言える。

©YokohamArtLife

各団体からの報告1　ザ・ダークルーム・インターナショナル

個別指標の結果①

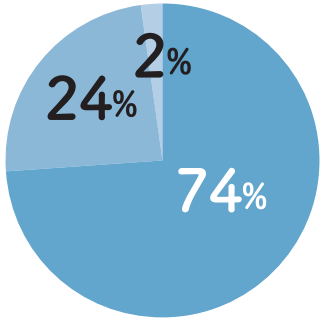
写真との関わり（n＝45）



- モノクロ写真を撮影している
- デジタルカメラで撮影している
- スマホ・携帯で撮影している
- 鑑賞する機会が多い
- あまり関わっていない

個別指標の結果②

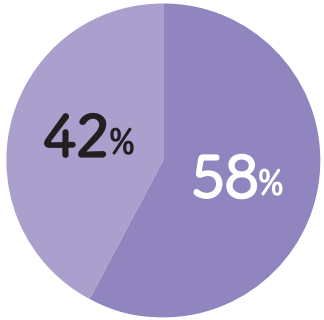
視点の変化（n＝45）



- そう思う
- どちらとも言えない
- そう思わない

個別指標の結果③

同様イベントの参加意向（n＝45）



- 同じ場所で開催するなら参加したい
- 他の場所で開催しても参加したい

©YokohamArtLife

各団体からの報告1　ザ・ダークルーム・インターナショナル

自由記述

〈機会〉
- 子連れで参加できるプログラムが少ない。
- 興味があるが不便な場所での開催だと参加できない。
- 情報が届かず気付かない。
- 撮影技術のヒントを得に。自分がもっと積極的になれればいい。

〈変化〉
- 子どもに説明できなかったことを教えてもらえて良かった。しかも楽しかった。
- 光の捉え方、人物の動きに意識が行くようになった。
- 身近なものに対する興味がわいた、(写真の)面白さに触れられた。

〈内容〉
- とてもいい内容のWSなのに参加者が少なかったのがもったいない。
- 小学校で案内を配るなど告知方法を工夫出来たらと思います。
- 制作体験が好きなので、持ち帰れるものが出来たのがうれしい。

今回の気づき・今後の改善点等

〈広報〉
- ターゲットに合わせた広報の工夫は改善の余地があると感じる。

(シニア層)神奈川新聞・広報よこはま・町内会回覧板等　(子育て世代)広報よこはま・学校を通した告知等
→ 一緒に参加する人がいることで、継続参加に繋がる。

〈内容〉
- 世代によって芸術文化体験に求める・期待するものが異なっている。

(シニア層)趣味・専門技術に対する探究心、孫や家族とのコミュニケーション　(子育て世代)体験・制作型かつ生活圏内での開催、ママ友や子供の友人と一緒の参加
→ いずれも都心部でない郊外区で、生活圏内での継続開催が有効であると感じる。

〈改善点〉
参加者属性や、反応は概ね当初の想定の範囲内であったが、世代によって異なるリアクションがある中で、共通していたのは写真を通して「人や場とのリアルなコミュニケーション」を得られる・得たいというもの。期間中に、市内・都内の商業施設からのPHOTO CABIN出展のオファーを複数頂いたことから、今後は単発の集客イベントとの差別化を図り、またPHOTO CABINの1回に掛かる費用等、マネタイズを確立することで持続可能な自立型事業としていきたいと考えています。

©YokohamArtLife

各団体からの報告2　スタジオゲンクマガイ

■開催概要

①「左近山アートフェスティバル!」
②「左近山アトリエ131110」

■実施会場

①左近山団地みんなのにわ(旭区)…11/30 開催
②左近山団地の商店街(旭区)……12/ 7 開設

■実施プログラム

①参加アーティスト37組による様々なアート展示、WSやフードコートなど
②その月のアーティストの個展や様々なWSの開催、カフェ、場の提供

↑「左近山アートフェスティバル!」開催チラシ

©YokohamArtLife

各団体からの報告2　スタジオゲンクマガイ

■団体概要

STGK（株式会社スタジオゲンクマガイ）は、横浜をベースに活動するランドスケープ設計事務所です。
2016年に「左近山団地」の広場「左近山みんなのにわ」を設計することになったことから、巨大団地の再生との関わりをスタートしました。広場の竣工後も、設計を担当したスタッフが団地に移り住み、さらにその広場で結婚式を挙げるなど、深い関わりが続いています。

■事業目的

その左近山団地内で、多世代の交流しながらアート活動が行われている状況を作り、あらゆる人たちが芸術文化を体験することで、住民たちが様々な表現に出会って感動したり、自らアートに組み込んだり、暮らしの中にアートを取り入れたり、外から来たアーティストやお客さんが左近山の新しい価値を発掘するきっかけを作ったりと、左近山の暮らしがより一層輝くような取り組みをするためにプロジェクトを実施しました。

■実施場所の設定理由

相鉄線二俣川駅よりバスで20分ほどの郊外にある、およそ4800戸の巨大団地「左近山団地」は入居開始から50年余経過、およそ9000名（平成28年）の住民の4割以上が65歳を超え、高齢化が進んでいます。加えて人口減少も加速し、2020年には8000名まで減少するとみられている課題をかかえる地域です。この「左近山団地」を舞台に、好きなアート鑑賞が困難になった高齢者や、子どもたちのために、団地にいながらほぼ毎日アート活動と触れ合える場を作り、このような住民の方々の様々な課題の解決の助けとなることを目指しこのアートプロジェクトを実施しました。

■対象者の設定理由

高齢になり団地の外でアート鑑賞することが困難になった団地の初期入居者、共働きの忙しい家庭の子どもたちを主な対象者としました。さらに、団地への住替えを検討中の将来の住民へも、新たな魅力をアピールします。

■実施形式の設定理由

11/30「左近山アートフェスティバル!」でプロジェクトをキックオフ、12/7商店街にアート拠点「左近山アトリエ131110」を開設、毎日のようにアート活動が行われている状況を生み出すことで、単発のお祭りだけでは実現できない、コミュニティの醸成を目指しました。

©YokohamArtLife

各団体からの報告2　スタジオゲンクマガイ

・11月30日 広場イベント「左近山アートフェスティバル！」開催
・12月 7日 商店街内にて、アート拠点「左近山アトリエ131110」開設

参加者数

合計2215名

実施地域

旭区

普段芸術文化活動に参加していない割合*1

35%

（フェスティバル 193名＋アトリエ 22名）
回答数：215名（内、9名が無回答）

今後芸術文化活動に参加する機会を増やしたいと思った割合*2

〈全体〉

75%

（フェスティバル 193名＋アトリエ 22名）
回答数：215名（内、11名が無回答）

〈普段触れていない人〉

68%

回答数：75名

*1：芸術文化活動の機会の利用が年に1回以下の割合
*2：*1の回答者のうち、今後の参加意向でそう思う、少しそう思うと回答した割合

©YokohamArtLife

各団体からの報告2　スタジオゲンクマガイ（左近山アートフェスティバル!）

↑2019/11/30(土)プロジェクトの皮切りに、「左近山みんなのにわ」で「左近山アートフェスティバル!」を開催　横浜内外から37以上のアーティスト/グループが団地の広場に集結
（撮影：菅原康太）

↑「左近山の好きな場所」の旗立てに250名参加／防災ジオラマ推進ネットワーク
（撮影：菅原康太）

↑左近山小学校生徒による発表風景（撮影：菅原康太）

↑2019/11/30(土)「左近山アートフェスティバル!」開催チラシ

©YokohamArtLife

各団体からの報告2 スタジオゲンクマガイ（左近山アトリエ131110）

↑2019年12月7日(土) 左近山団地の商店街の一角に、アート拠点「左近山アトリエ131110」オープン 団地にアートがやってきた! ギャラリー、ワークショップ、本、クラブ活動など楽しめるスペース

12月の展覧会とワークショップの一覧

↑“いい絵だねえ。心に来るなあ…ピカソとかじゃなくて、これなんだよ!”（左近山団地在住 70代男性 アート愛好家）

↑1月開催「押忍! 手芸部」展

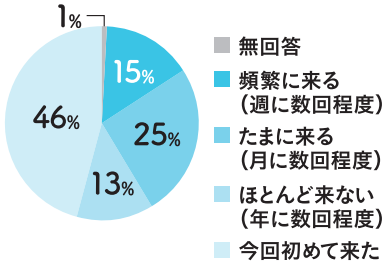
1月の展覧会とワークショップの一覧

©YokohamArtLife

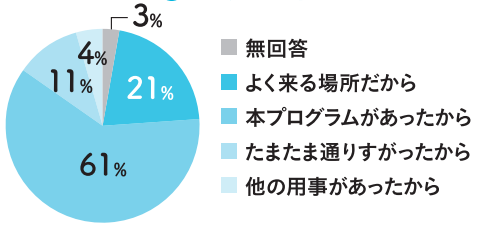
各団体からの報告2 スタジオゲンクマガイ（左近山アートフェスティバル!）

開催場所の来場頻度と来場理由（n＝193）

⑥普段の来場頻度

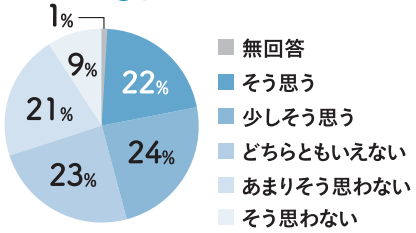


⑦来場理由

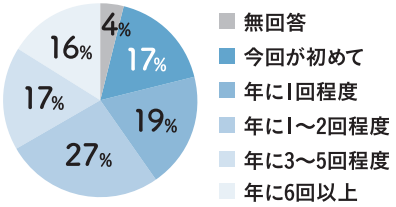


芸術文化に関する機会の充実と利用頻度（n＝193）

⑨機会の充実

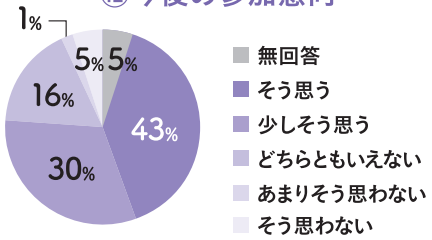


⑩機会の利用

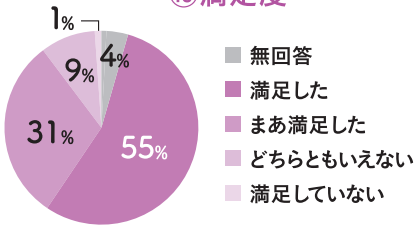


満足度、今後の参加意向（n＝193）

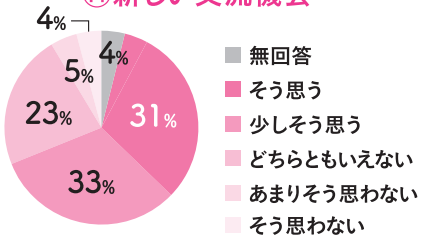
⑫今後の参加意向



⑬満足度



⑭新しい交流機会



考察

来場した人の内「今回初めてきた」「ほとんど来ない」人は59%、「本プログラムがあったから」が61%、フェス会場の広場から離れた街区の住民の方で、全戸配布のチラシを見て来場された方が半数ほどいらしたことが、想定される。機会の利用が「今回が初めて」～「年に1~2回程度」63%＝普段芸術文化に触れる機会のほぼない人が本フェスで体験できたといえる。またフェスについて肯定的な回答が今後の参加意向では73%、満足度は86%であり、参加者の多くは本フェスに満足し、今後芸術文化の機会により参加する意向が強まったと言える。交流機会について非肯定的な人が32%、なんらかの改善が必要であることが考えられる。

©YokohamArtLife

各団体からの報告2 スタジオゲンクマガイ（左近山アートフェスティバル!）

自由記述

〈アート機会〉
●色々な作品に出会えた。子供がアートにふれるきかいが少ないのでこのようなイベントはいいと思います。
●住民の方と、アーティストの方が同じ場でイベントしていることが、まずすばらしい!!

〈世代間交流〉
●子供から高齢者まで幅広い年齢層が楽しんで参加していてとてもGoodです。出店者のクオリティも高く、とてもイゴコチの良い空間と時間を過ごすことが出来ました!
●多くの世代が楽しんでいて、いいイベントだと思いました。
●子どもから元気をもらえるため、大勢で集まれてうれしい。
●活気があるイベントだと思った。昔はこの場所もさかえていた、それを思いだした。若い子も多くて明るい。
●いろんな世代がきている。ゆっくりくつろげるスペースがたくさんつくってあり、なんとなく居れることです。
↔ ●若い人いっぱいで話しづらい。/ ●若い人が多いが話しかけられない。

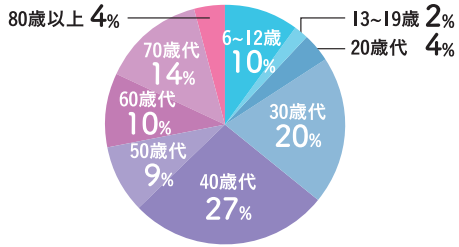
〈次回要望〉
●このような機会が一年に一度でもあって左近山もにぎやかになりいいと思います。
●気がねなく参加できる感じが良かったです。これからもこういう機会を増やして欲しいです。
●団地住民外の人がこのようなプログラムを開催して頂けるの感謝します。年に1回はやって下さい。

〈左近山〉
●場所的に来やすい。
●地域の人達が笑顔で集まれるイベントはとても良いと感じました。

今回の気づき・今後の改善点等

〈気づき〉
●お客さまの大多数が、左近山団地とその周辺の住民の方で、多様な世代の参加があった。
●お客さま・アーティスト・スタッフが一体となり楽しみ、笑顔があふれていた。
●左近山 愛のあふれるイベントになった。
- ジオラマワークショップ「左近山の好きな場所」旗立てに250名参加した。
- 左近山小学校生徒による「左近山の良いところ」「左近山体操」の発表がにぎわった。

〈1.年齢〉



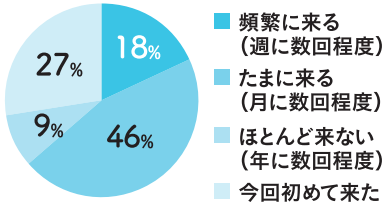
〈改善点〉
●「もっと宣伝案内をした方が良いのでは。少し遠慮がちでした」→ 告知の方法改善を検討。
●「外部の人や色々な世代の人が交流していてよかった」との声がある一方で、高齢者より「若い人が多くて良いが話しかけづらい」との声。→ 世代間を繋げる仕組みを検討。
●晩秋で日陰の気温が低く、楽器演奏者の指が動かないほど寒かった。→ 暖かい時期に開催したい。

©YokohamArtLife

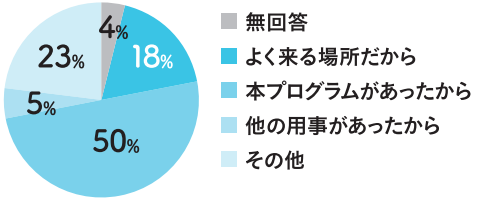
各団体からの報告2 スタジオゲンクマガイ（左近山アトリエ131110）

開催場所の来場頻度と来場理由（n=22）

⑥普段の来場頻度

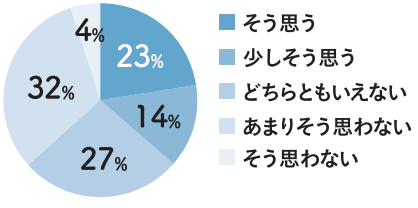


⑦来場理由

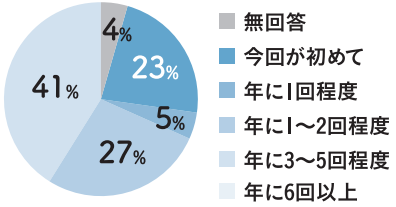


芸術文化に関する機会の充実と利用頻度（n=22）

⑨機会の充実

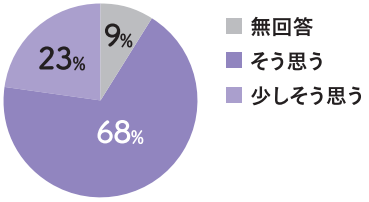


⑩機会の利用

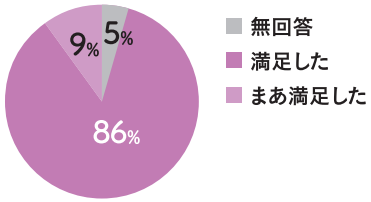


満足度、今後の参加意向（n=22）

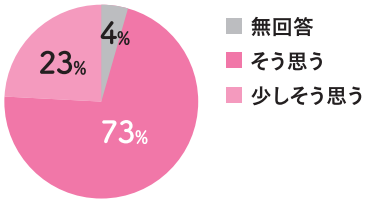
⑫今後の参加意向



⑬満足度



⑭新しい交流機会



考察

（サンプル数22：押忍！ 手芸部といといゆきのワークショップ参加者→団地外のお客様が半数を占め、データに偏りあり）機会の充実が肯定的でない人が63%、機会の利用も「今回が初めて」～「年に1~2回程度」が28%、今後の参加意向は91%であり、アトリエの活動を体験することで、普段芸術文化に触れていない人も刺激を受け、芸術文化への意欲が高められたと言える。満足度・今後の参加意向については肯定的回答が90%以上であり、参加者はアトリエの活動に満足していることがわかる。交流機会も肯定的回答が96%で、アトリエが新たな交流機会を創出していることがわかる。

©YokohamArtLife

各団体からの報告2 スタジオゲンクマガイ（左近山アトリエ131110）

個別指標インタビューとアンケート自由記述より/今回の気づき（アート関連）

❶12月：いといゆき・ちょっとこ展

●「心に来るなあ…ピカソとかじゃなくてこれなんだよ!」（左近山団地在住/70代男性/アート愛好家）
●「ピンクの猫」3部作は、左近山診療所 院長先生が購入、1月から病院の待合室を温めている。
●「公園や自然が多くて某都内団地より住みやすそう。引っ越したくなった!」（都内/20代/女性）

→ いといゆきさんと作品は人々の心を癒やし、遠くから来訪するファンは左近山団地の良さを発見。
→ いといゆきさんの「似顔絵ポストカード」は好評につき、毎月開催することになった。

❷1月：押忍! 手芸部展/石澤彰一部長

●展示作品にインスパイアされ、手芸部を自主練する住民の方がつぎつぎと現れた。（畳屋のトミーさん・洋品店主の鈴木さん・60〜70代の女性たち・小学生たち）
●小学生たちにも、部長のお土産のリリヤンが流行、近隣の100円ショップでは品切れ発生。
●アトリエにも、毎週水曜に活動する「編み物部」が発足。

→ 左近山団地の一部の住民を刺激し、影響を及ぼした展示だった。
→ 石澤部長も部活継続に肯定的なため、来年度も継続して企画したい。

❸そのほか：アトリエが左近山団地に及ぼした効果（アート関連）

●アトリエの活動に影響をうけ「暫く休んでいた創作意欲が、あらたに活性化された」住民がいる。
●アトリエが、左近山に住むアート愛好家の皆さんのサロン的な場所となっている。
- 工作をしながらお客様に作品をプレゼントするSさん。（70代男性）
- 買物帰りに寄り、アートについて話したり、画材・美術本を寄贈されたりするHさん。（70代男性）
- 自分の作品を披露したり、スタッフやお客さんと交流される方々も多く訪れる。

●アトリエを体験し、自分でもワークショップを提供してみたくなった高齢者や主婦の方も多く現れた。

©YokohamArtLife

各団体からの報告2 スタジオゲンクマガイ（左近山アトリエ131110）

個別指標インタビューとアンケート自由記述より/今回の気づき（コミュニティ関連）

❶団地住民の交流が広がる場となった

●「家で一人いる事が多いので外出する機会になった。色んな人と話をする機会になって良かった。」（70代/女性）
●「孫や新しい方々とお話ししながら楽しい時間が過ごせた。」（70代/女性）
●「スタッフとアートについて一緒に話せるのがよい。」（70代/男性）
●大きなテーブル4台しかないため、自然と相席し、お客さん同士の交流が生まれている。
　- テーブルを囲んでトランプやかるた、リリヤンをやったり。
　- お金を持たない子どもが、お年寄りにお菓子を分けてもらったり。
●スタッフもお客さんに混ざり、交流の効果を上げている。

❷多様な団地住民の居場所となった

●「居場所ができた! 仕事と家の間にアトリエ。現実を続ける間の気持ちを切り替える場」（40代/女性）
●「家みたいで落ち着く。友達と集まれる場所ができた。」（小学4年/女子）
●「左近山にアトリエができて嬉しい。こういうお店ができればいいなあと思っていた。」（70代/男性）
●親世代にとって仕事と家庭の間で一息つける場、小学生にとっても放課後に友達と集まり絵を描いたり宿題やったりする場、様々な世代のサードプレイスになっている。
●忙しい家庭の小学生も毎日来店、大人に遊んでもらったり、しつけられたりし、地域で子供を育てる場となっている。
●認知機能低下がみられる方も含め高齢者が多く来店し、交流を楽しむ場 兼 安否確認の場となっている。
●25歳～70歳の多世代をアルバイト雇用。70歳は女性2名、アトリエで働けることを喜んでいる。

©YokohamArtLife

各団体からの報告2 スタジオゲンクマガイ（左近山アトリエ131110）

個別指標インタビューとアンケート自由記述より/今回の気づき

〈今後の改善点等〉

●左近山団地展覧会

アトリエに作品を持ち込まれる芸術家やアート愛好家が多数いる。左近山住民の展覧会を開きたい。
→ ベストな展示開催方法を検討中

●作品販売の機会

アトリエで生まれた作品や、住民の方々が持ち込まれる作品を、販売する機会を設けたい。
→ 商店街イベントでの販売を検討中

●地域の既存施設とのアート連携

病院・保育園・学校・学童・特別養護学校・スーパー（フードロス）など地域の既存施設と連携し、
いまある課題のアートによる解決や、アートと福祉の連携にチャレンジしてみたい。

©YokohamArtLife

各団体からの報告3　ヒューマンフェローシップ

■開催概要

「生きづらさを抱える子ども・若者とつくる
ミュージカルプロジェクト」

■実施会場

LiveboxM6（磯子区）……2019年9月～12月 練習
2019年12月22日　発表会

新港中央広場／NIGHT SYNC YOKOHAMA（中区）
……2019年12月21日　発表会

■実施プログラム

『ジーザスクライスト スーパースター』

・ミュージカル練習（WS形式 週3回実施）
・ミュージカル発表会

↑「ジーザスクライスト スーパースター発表会」
開催チラシ

©YokohamArtLife

各団体からの報告3 ヒューマンフェローシップ

■団体概要

私たちNPO法人ヒューマンフェローシップは、1988年より不登校・ひきこもり・発達課題など、生きづらさを抱える若者達の自立就労を支援し、共に生きる場を作ってきた民間の若者支援団体です。現在は、共同生活・就労支援を軸に、子育てから困窮者支援まで幅広く事業を実施しています。

■事業目的

近年は行政からの委託事業も多く、ニート・若年無業者の若者の自立就労がメインテーマとなっていますが、当事者への直接的な支援と共に、支える地域社会への働きかけは重要であると考えています。困難を抱える子ども・若者への支援には当事者だけでなく、若者達が暮らす地域全体を豊かに、住みやすい地域にすることが必要です。しかし、実際の地域社会はニート・ひきこもり等の困難を抱える若者に対する理解や認識が薄く、また偏見も多くあります。若者達がのびのびと生きる事ができる環境をつくる為に、地域への理解・働きかけを行いたいと思っています。

■実施場所の設定理由

横浜市内。地域に若者に対する理解者、支援者を増やし、若者を支えるチーム・地域を形成する。若者支援は当事者の課題・問題にばかり目が行き、「改善させる事や矯正する事」のようにとらえられがちだが、本当は若者を支える地域が理解のある行動をとれる事が重要である。このプログラムを通じて若者を支える地域をつくるモデルを作りたいと考えている。

■対象者の設定理由

生きづらさを抱える若者や困難を抱える若者に共通するのは、圧倒的な経験不足による耐久力や柔軟性の弱さだと現場では実感している。直接的に就労に結びつかないような経験や体験が、本当は若者達の自立に大きなファクターである事をこのプログラムを通じて実証したい。

■実施形式の設定理由

生きづらさを抱える若者に対し、ミュージカル発表という「未知なる経験の提供」をし、自己表現の場を持つことにより、社会にでるきっかけをつくり、一歩を踏み出す事ができる機会をつくる。

©YokohamArtLife

各団体からの報告3　ヒューマンフェローシップ

来場者・参加者数

1298名

実施地域

中区・磯子区

普段芸術文化活動に参加していない割合*1

来場者*3　38%
回答数：86名

参加者*4　57%
回答数：17（内、無回答1名）

今後芸術文化活動に参加する機会を増やしたいと思った割合*2

	〈全体〉	〈普段参加していない人〉
来場者*3	80% 回答数：86名	66% 回答数：32名
参加者*4	76% 回答数：17名	78% 回答数：9名

*1：芸術文化活動の機会の利用が年に1回以下の割合
*2：*1の回答者のうち、今後の参加意向でそう思う、少しそう思うと回答した割合
*3：上演会場への来場者
*4：ミュージカル参加者

©YokohamArtLife

各団体からの報告3　ヒューマンフェローシップ

↑発表風景　at NIGHT SYNC YOKOHAMA

↑発表風景　at NIGHT SYNC YOKOHAMA

↑クリスマスフェスタでの発表風景　at Live Box M6

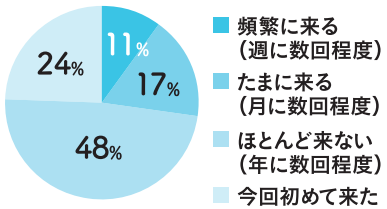
↑ミュージカル練習風景

©YokohamArtLife

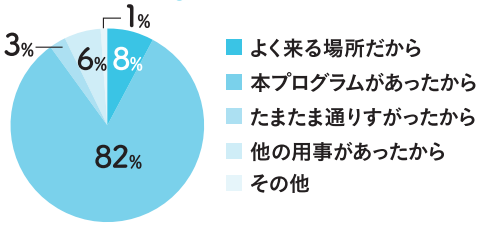
各団体からの報告3 ヒューマンフェローシップ（来場者）

開催場所の来場頻度と来場理由（n=86）

⑥普段の来場頻度

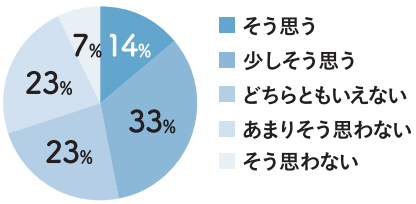


⑦来場理由

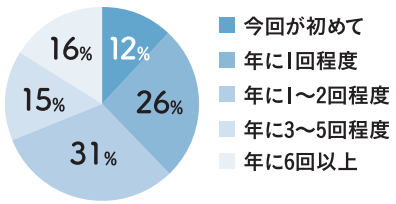


芸術文化に関する機会の充実と利用頻度（n=86）

⑨機会の充実

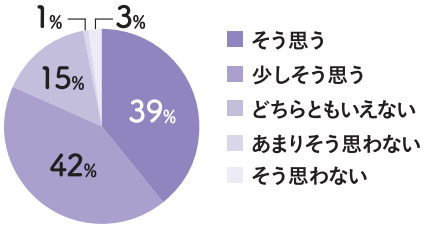


⑩機会の利用

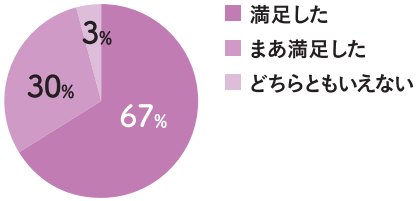


満足度、今後の参加意向（n=86）

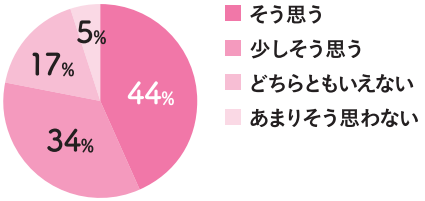
⑫今後の参加意向



⑬満足度



⑭新しい交流機会



考察

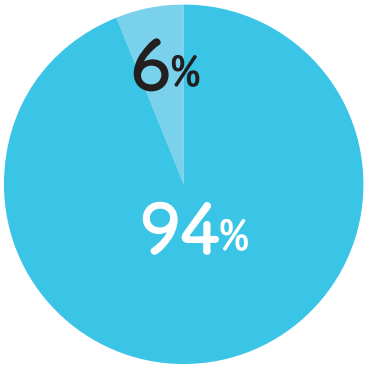
普段の来場頻度は「ほとんど来ない」「今回初めて来た」という割合が72%で、今回の来場理由が「本プログラムがあったから」が82%を占めている。参加者のこれまでの芸術文化の鑑賞や参加機会、回数に関しては少な目の傾向が強いが、本プログラムには90%以上の方が「満足した」「まあ満足した」と回答しており、今後の芸術文化の鑑賞、参加意向について「そう思う」「少しそう思う」割合が81%ある。本プログラムが開催場所への来場理由に寄与し、芸術文化への関心度を高める効果があったと考えられる。

©YokohamArtLife

各団体からの報告3　ヒューマンフェローシップ（来場者）

来場者の個別指標の結果①（n=86）

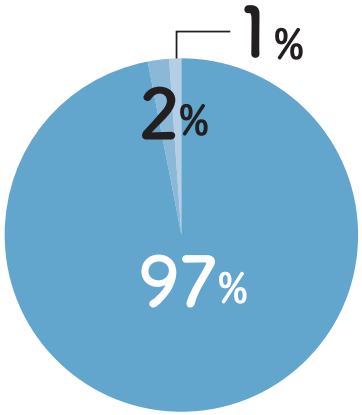
⑯活動の認知



- 知っていた
- 知らなかった

来場者の個別指標の結果②（n=86）

⑰活動の今後の応援



- そう思う
- 少しそう思う
- どちらともいえない

©YokohamArtLife

各団体からの報告3　ヒューマンフェローシップ（来場者）

自由記述

〈機会〉

●子どもたちの劇ダンス、良かったです。プロの演奏、パフォーマンス素晴らしい。
●子ども～大人が一緒になって表現活動に参加されている点が印象深かった。枠に囚われていない意見、みんなが同じ方向を向いている気持ちが伝わってきた。
●若者のエネルギーを感じた。
●演者の真剣な思いが伝わってきた。
●子供たちが楽しそうでよかった!
●生きづらさを抱える若者たちにとって、ナイトシンクという非日常的な空間でのミュージカル上演はとても貴重な経験になったと思います。
●何か一つの目的に向かって、頑張ってやり遂げた感を身近に感じられた。
●ミュージカルと若者支援の繋がりが面白く感じた。
●若者たちの生き生きとして、堂々とパフォーマンスをしている姿を見て感動しました。

今回の気づき・今後の改善点等

〈気づき〉

●グーグルフォームを活用したアンケート調査は利便性が高かった。　※今回、86件回収のうち、71件がグーグルフォームだった。
●今回、回収できたアンケートの回答については、もともと活動を知っていた人がほとんどだった。
●通りがかりの観覧者に対して、参加している若者たちのバックグラウンドを理解してもらうのは難しかった。
●ナイトシンクの発表では、通りがかりの多くの人に観てもらう事が出来たが、アンケートのお願いはなかなか難しかった。

〈改善点〉

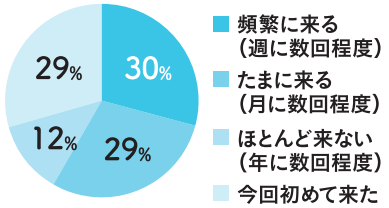
●実施期間が短かったために動員に苦労した。
●共通指標の設問設定には、ロジックモデル作成から始めるなど、もう少し時間をかけてもよかった。

©YokohamArtLife

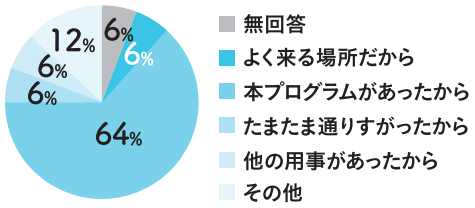
各団体からの報告3　ヒューマンフェローシップ（参加者）

開催場所の来場頻度と来場理由（n＝17）

⑥普段の来場頻度

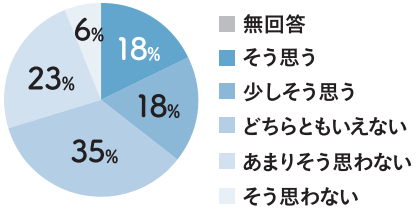


⑦来場理由

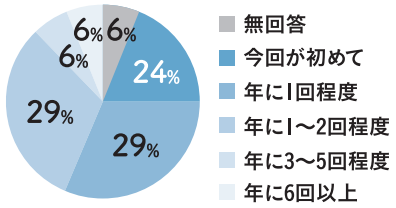


芸術文化に関する機会の充実と利用頻度（n＝17）

⑨機会の充実

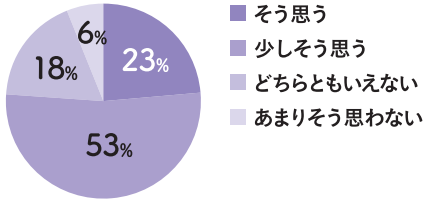


⑩機会の利用

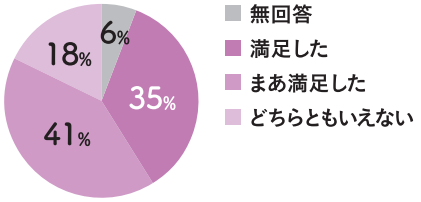


満足度、今後の参加意向（n＝17）

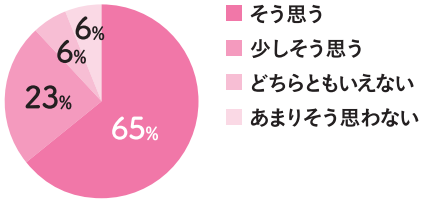
⑫今後の参加意向



⑬満足度



⑭新しい交流機会



考察

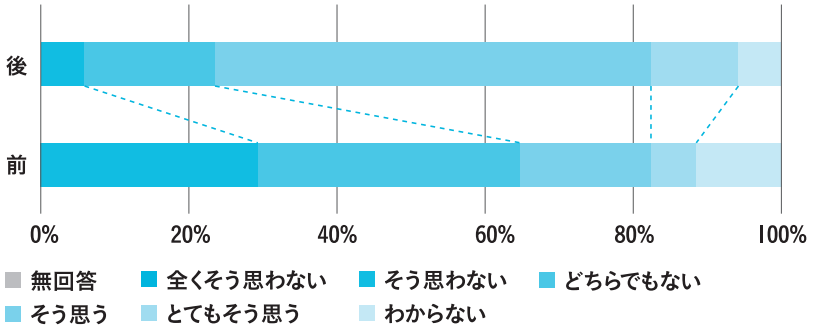
本プログラムに参加したメンバーは、K2グループが実施する他のプログラムに参加しているメンバーも多く含まれていたため、普段の来場頻度は高めの傾向があり、また参加者本人であるため、来場理由も「本プログラムがあったから」が多数であった。芸術文化に関する機会や利用頻度は全体的に低かったが、本プログラムを経て、今後の参加意向が高まった層が76%あり、満足度も70%以上が「満足した」「まあ満足した」とあり、開催場所と芸術文化への関心度には寄与したといえる。

©YokohamArtLife

各団体からの報告3　ヒューマンフェローシップ（参加者）

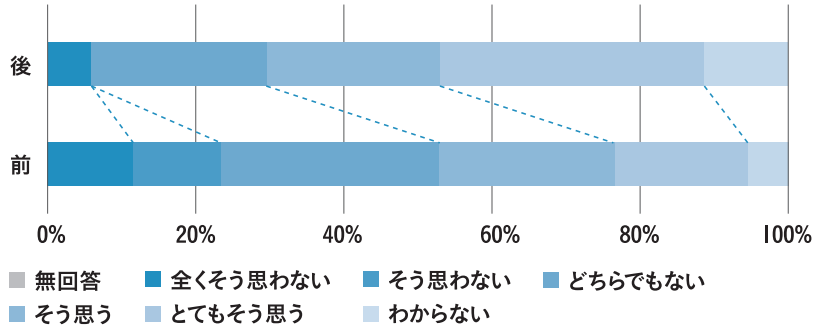
参加者の個別指標の結果①

14. 得意・不得意の理解



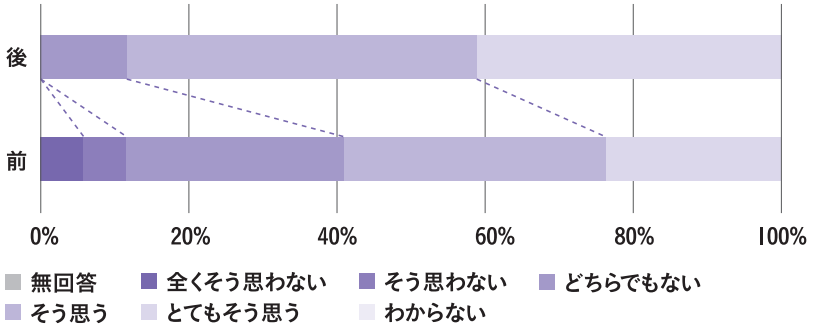
参加者の個別指標の結果②

18. 家族からの理解



参加者の個別指標の結果③

11. 挑戦



考察

- プログラム参加前と後を比べたアンケート調査で、変化の度合いが大きかった3項目を抜粋。
- 自分の得意不得意を理解していると思いますか？という設問は、「そう思わない」の数と「そう思う」の数がプログラム参加前後で逆転しており、最も変化が大きかった。
- 挑戦意欲に関しても、参加前は「全くそう思わない」「そう思わない」という層が一定数いたが、参加後にはゼロになっている。
- 家族から理解されていると思いますか？という設問に対しても、「そう思わない」「全くそう思わない」の数が減り、「とてもそう思う」の数が大きく増えており、若者本人に向けてのプログラムであるにも関わらず、家族関係に対してポジティブな変化が大きかったのは、特筆すべき点である。

©YokohamArtLife

各団体からの報告3　ヒューマンフェローシップ（参加者）

自由記述

〈機会〉

●ダンスが楽しかった。

●身体を動かすきっかけになった。

●ミュージカルを通じて色々な話題がうまれたりなかよくなれたので良かった。

●プロの先生方に教えていただけて感動した。

●もっと気楽に楽しくできたらいいなと思いました。

●かっこよかった。

●話す人が個人的に増えた。

今回の気づき・今後の改善点等

〈気づき〉

●これまで関わりのなかった外部の講師の方も多数入ってくれたことで、新しい発見、気づきがあった。

●プログラム参加前後では、ほとんどの設問で改善が見られたが、設問によって大小があり、興味深かった。特に、プログラム自体が、当事者である若者たち本人への働きかけのみだったにも関わらず、全体的に家族関係が改善されているという結果がでたのは嬉しい発見だった。

●今まで活動に参加しなかった層の若者たちの参加があったことは良かった。

〈改善点〉

●練習（受け入れ）を随時としたため、参加者実数は61名だったが、アンケートが取れたのは最後まで参加した25名のうちの、中学生以上の17名。参加者が減ってしまったことには、こちらの受け入れ態勢が整っていなかったことにも要因がある。

©YokohamArtLife

各団体からの報告4 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会

■開催概要

①「BankART school 出張編」（以下スクール）

②「猫の小林さんとあそぼう! プロジェクト」（以下WS・展示）

■実施会場

①BankART Station（中区）/並木ラボ（金沢区）等
……11/20、11/30、12/19、1/11、1/25

②並木ラボ・並木クリニック・並木コミュニティハウス（金沢区）
……12/8（WS）、1/31（展示）

■実施プログラム

①「金沢区とみなとみらい」をテーマにした連続講座

②「猫の小林さん」の制作WSと屋外作品の展示

↑「BankART school 出張編」、「猫の小林さんとあそぼう! プロジェクト」開催チラシ

©YokohamArtLife

各団体からの報告4 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会

■団体概要

YOKOHAMA AIR ACT実行委員会は、「文化芸術創造都市・横浜」の担い手として都心臨海部で活動を行なう特定非営利活動法人BankART1929と特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンターが共同で立ち上げた団体である。

■事業目的

横浜市では、2004年から「創造都市（クリエイティブ・シティ）」に着目した様々な施策を、都心臨海部に集中して展開してきた。そのため、市内郊外部での芸術文化活動は少なく、地域的な格差が生じている。今回はこの問題を解消するべく、2つの団体が都心臨海部から市内郊外部へと活動を広げ、芸術文化に関心がない人々も含めた市民のだれもが参加しやすいアートプロジェクトの実施に取り組む。市民とアーティスト、市民とアート作品との出会いの場を、市民の日常生活に近い場所に出向いて提供することで、クリエイティブ・シティが示すアートによるまちづくりを体感できる機会をつくる。最終的には、本事業が市内郊外部における「文化芸術創造都市・横浜」のモデル事業となることを目指していく。

■実施場所の設定理由

横浜市金沢区（市内郊外部）および西区・中区（都心臨海部）。1960年代に構想された横浜市六大事業によって、西区・中区の戦後復興と機能強化に併せて開発された金沢区といった歴史的なつながりから。

■対象者の設定理由

スクール　：金沢区および西区・中区の歴史や都市計画に興味のある人。
展示・WS：金沢区の団地に住む親子と高齢者。

■実施形式の設定理由

スクール　：普段は忘れられがちな歴史を学び直し、両地区のつながりを紐解く連続講座の開催。
展示・WS：金沢区の日常を舞台に市民とアーティスト、市民とアート作品との出会いのきっかけをつくるWSと屋外での作品展示の開催。

©YokohamArtLife

各団体からの報告4 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会

参加者数

921名

実施地域

西区（みなとみらい）
金沢区

普段芸術文化活動に参加していない割合*1

BankART school 出張編（スクール） 5%
回答数：41名（内、無回答9名）

猫の小林さん（WS・展示） 13%
回答数：29名（内、無回答2名）

今後芸術文化活動に参加する機会を増やしたいと思った割合*2

	〈全体〉	〈普段参加していない人〉
BankART school 出張編（スクール）	63%	※ ー%
猫の小林さん（WS・展示）	62%	※ ー%

回答数：41名（内、無回答9名）

回答数：29名（内、無回答4名）

*1：芸術文化活動の機会の利用が年に1回以下の割合
*2：今後の参加意向でそう思う、少しそう思うと回答した割合

※：データ数が少ないため算出せず

©YokohamArtLife

各団体からの報告4 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会

BankART school 出張編

「金沢区とみなとみらい」をテーマに、横浜市六大事業の研究者や同事業に当時関わっていた人物を講師に迎え、計5回の連続講座を開催　テーマにゆかりある場所を会場に実施し、最終回は街歩きも行った

猫の小林さんとあそぼう! プロジェクト

12月に開催したワークショップは、1年間盆栽を育てることをとおして参加者の各家庭で作品の成長を見守る　1年後には再び集まり観賞会を開く（撮影：飯川雄大）

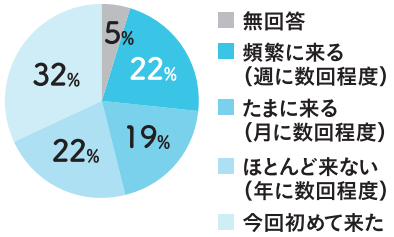
シーサイドタウン内で作品の設置場所を公募　プライベートな敷地にパブリックなアート作品を展示し、アートが地域コミュニティにもたらす影響について検証した
（撮影：阪中隆文）

©YokohamArtLife

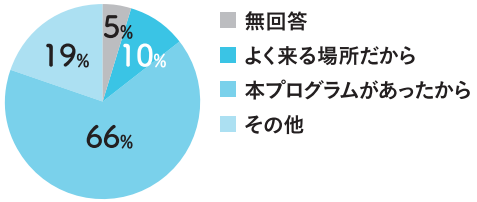
各団体からの報告4 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会（スクール）

開催場所の来場頻度と来場理由（n=41）

⑥普段の来場頻度

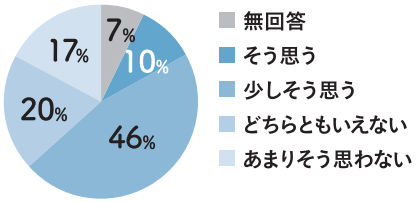


⑦来場理由

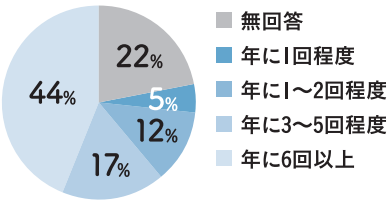


芸術文化に関する機会の充実と利用頻度（n=41）

⑨機会の充実

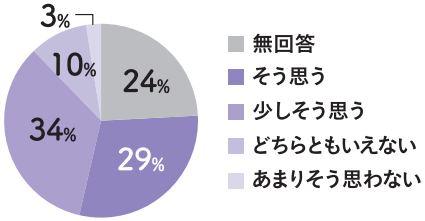


⑩機会の利用

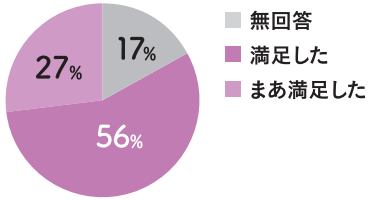


満足度、今後の参加意向（n=41）

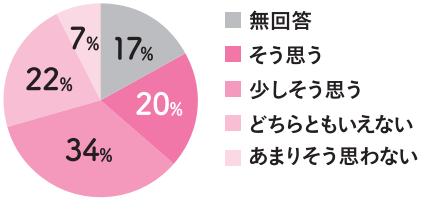
⑫今後の参加意向



⑬満足度



⑭新しい交流機会



考察

まず、満足度が80%を超えているのは、一人一人の講師の方が、それぞれのテーマを分かりやすく、かつ掘り下げてお話していただいたことが要因としてあげられる。また、82%が横浜市内の参加者ということもあり、自分たちもよく知る街の成り立ち、今後のありかたを深く考える場にすることができた。交流機会が54%と、スクール後に、パブ営業を行いアフタートークの場を設けたので、受講生、先生との同士の交流も深めることができた。上記のことも含め、計5回の開催で60%を超える複数回参加を得ることができた。ただ、不定時期の5回開催だったので、機会の充実の賛同「そう思う」10%と他の意見より少なかったといえるので、より参加しやすいシステムを考える必要がある。

©YokohamArtLife

各団体からの報告4 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会（スクール）

自由記述

●横浜の広さや多様性、奥深さを感じさせられる企画で面白かった。

●「金沢区とみなとみらい」みなとみらいが作られた流れや、コンセプトなど、普段かよっているだけではわからない様々な計画や考えを学べた。

●芸術を大切にする横浜市になるため、このような講演は参考になった。

●今日のテーマは都市計画なので、芸術文化とは結びつかない。
ただ、テーマ、内容はとてもおもしろく、シリーズ全て出席することで、ソフト、ハード含めつながるものと思う。

●自分の住んでいる街がどのようにできたのか…都市計画の原点がわかってとても面白かった。

●これまで知ることがなかった土地の記憶をたどることができた点が特に良かった。

今回の気づき・今後の改善点等

〈気づき〉

●本スクールによって、金沢区（郊外部）とみなとみらい（都心臨海部）の歴史的なつながりを学び直す機会を創出した。

●連続講座にしたことで、継続的な参加者にとっては重層的な学びを得られた。

●槇文彦氏や田村明氏のようにそれぞれの地区に都市政策で関わったキーパーソンの存在を知ることもできた。

〈改善点〉

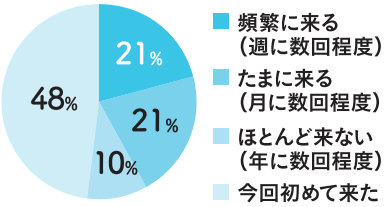
●スクールにおける学びが「猫の小林さんとあそぼう！ プロジェクト」の企画の基盤とはなったが、スクールでの学びとプロジェクトとのつながりをわかりやすい形で見せられなかったことは次回の改善点としたい。

©YokohamArtLife

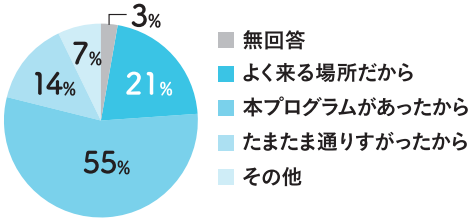
各団体からの報告4 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会(WS・展示)

開催場所の来場頻度と来場理由(n=29)

⑥普段の来場頻度

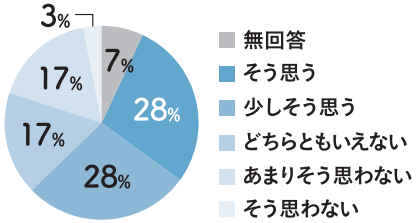


⑦来場理由

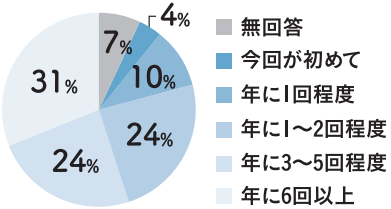


芸術文化に関する機会の充実と利用頻度(n=29)

⑨機会の充実

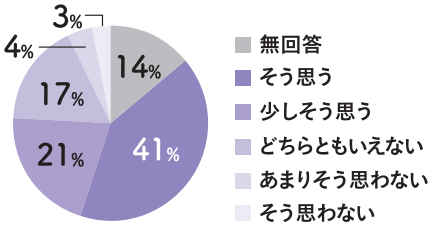


⑩機会の利用

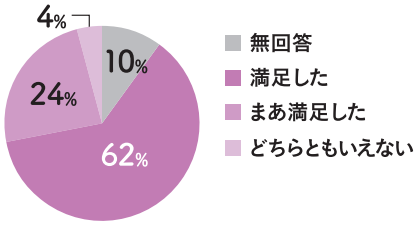


満足度、今後の参加意向(n=29)

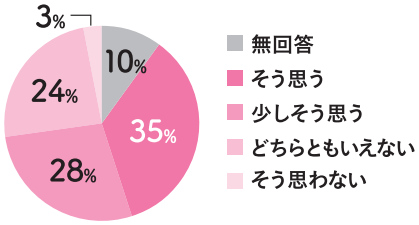
⑫今後の参加意向



⑬満足度



⑭新しい交流機会



考察

開催場所の来場頻度として「今回初めて来た」が48%、来場理由として「本プログラムがあったから」が55%だったことから、本企画の参加者は開催場所の条件よりもプログラム内容をみて参加した人が約半数を占めていたのではないだろうか。そして、機会の充実に肯定的な人が56%、機会の利用も3回以上とした人が55%を占めていたことから、元々芸術文化に興味のある人が多かったと考える。この結果は、アンケートを実施・回収できた場面が、ワークショップ(少人数の事前予約制)に偏った影響によるものではないかと考える。一方、プログラムの内容に関する参加者の評価は、肯定的な回答として、今後の参加意向では62%、満足度は86%、交流機会は63%であり、参加者の半分以上は本プログラムに満足し、今後芸術文化の機会により参加する意向が強まったのではないかと思う。

©YokohamArtLife

各団体からの報告4 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会（WS・展示）

自由記述

〈ワークショップ〉

●子どもの想像力や発想を自由に発揮できる場であったことが良かった。

●アートの繊細でこだわることを、暮らしに足してみようと思う。

●ワークショップの作業で一部急がされたのが気になった。一方で猫の顔を書く作業は参加者自身がやった方が意義があると思った。

〈展示〉

●地域に愛されている空気が伝わってきて、とても素敵なプログラムと作品だと思った。

●家族で来ても楽しくて、素晴らしい（作品も素晴らしい）。

●屋外アートは街を明るくする!

●ネコが見えにくいところに隠れていることで、見た人が驚いたり写真を撮ったり、日常の風景を一変させている。

●この展示が出来る環境を応援する街が素敵だと思った。

今回の気づき・今後の改善点等

〈気づき〉

●今回のワークショップおよび作品は、「ピンクの猫」が持つインパクトから、住民同士の話題となり、地域一体で人々がアートに関心を持つきっかけをつくった。

●作品を展示した現場では、住民の方々から「作品があることでまちを面白く感じる」や「こうした試みを続けてほしい」といった反応が多くあり、今回のようなアートプロジェクトへのニーズを強く感じるとともに、芸術文化に興味関心持つ住民の多い地域だと感じた。

〈改善点〉

●実施スケジュールがタイトだったため、住民への説明の時間が不足していた。次年度は実施期間にゆとりを持つことで、ワークショッププログラムの回数を増やし、作品を制作する過程においても住民の関わりを設けられるように構成したい。

©YokohamArtLife

4 今後の展望・提言 ～報告会より（実施団体コメント）

2020年3月13日に行った報告会における各実施団体の意見を掲載します。

■ザ・ダークルーム・インターナショナル

我々写真の移動暗室にしかできないという価値を2年目以降は広く周知をしていくことで賛同者を増やして、結果的には自分たちの活動基盤を強化していくことにつなげたいと思う。例えば、制作した写真を展示するなどすることで、また更に多くの人がそこの場所に訪れるという事が起こることを目標にして、頑張っていきたいと思っている。

■スタジオ・ゲンクマガイ

本来は、ランドスケープデザイン事務所なので、違う分野の事に挑戦したが、助成金の交付やACYの広報手伝いなども頂きプロジェクトが成功したことに感謝している。初めてだったこともあり、指標に関して全く分からないまま、個別指標もあまりできなかったが、今回アトリエを通して人と人がつながっていったり、高齢者の生活を少し豊かにすることが出来たり、子育ての環境を整えられたりという事が出来たという結果を見て、アートと福祉という指標にどういったものが考えられうるのかという事をみんなで考えていきたいと思う。制度への要望は、時期を早めてもらいたいという事。フェスティバルをもう少し暖かい時期にできたらと思っている。この助成金が続いていくといいと思っている。

■ヒューマンフェローシップ

評価指標の設計に関して興味があるが、今回の指標に関しては以前やったものの焼き直しであり、今回の共通指標の関わりが持てなかったことが反省点。以前も評価指標の設計はとても苦労したが、今回は今まで関わりが無かったアート分野の人達と様々な意見を突き合わせたり、話合えたりしたことがすごく良かった。その経験を二年目以降に言語化、可視化し、そういう結果を受けて、こういう提言が生まれたという過程を含めてモデルになるような事業になっていけば良いと思う。制度自体に関しては、時間が無かったので、最初の指標の設定のところでしっかり検討できなかったというのが本当の所だと思う。実際、各団体の中で話し合って何をどう取りたいかを言語化したら、いいものが取れると思う。

■YOKOHAMA AIR ACT実行委員会

この実行委員会として、この二つの団体（黄金町エリアマネジメントセンターとBankART1929）がここまで密に関われたことが良かった。そして、自分たちの活動を、普段活動している地域以外にどういう風に伝えていくかという事を考える機会を頂けたと思っている。すごく感謝している。自分たちの活動を、活動地域以外にどういう風に伝えていくのか、どういう風に受け入れられるのかという事を学び直す機会になったと思っている。とはいえ、団体連携というところで時間がかかってしまった。お互いそれぞれがやっていることがある中で、それをどうやってつなげていくか、うまく作り切れなかったところ。ここを次年度以降の発展材料として、プロジェクトの練り直しをしていきたいと思っている。制度設計へのリクエストは、期間をもっと余裕を持たせてもらえたらと思う。事業をやっていく中で、うまくいかない事。思い通りに行かないことの連続でした。始めて活動をする地域という事もあり、もう少し関係作りに時間をかけたかったと思う。郊外部に広げていく助成プログラムという事を言っているのであれば、事業実施の期間をもっと長く頂けるといいと思う。
指標については、我々が居ながらにして気が付いてこられなかった芸術文化の価値がどういったところにあるのかという事に関して、第三者的視点で価値を可視化して伝えていく必要があると感じた。この取り組みを継続的に続けていくためにも是非、助成事業を継続して行って頂きたい。

©YokohamArtLife

4 今後の展望・提言 ～報告会より（審査員コメント）

2020年3月13日に行った報告会における審査員の意見を掲載します。（当日欠席の委員は後日いただいた文章から抜粋）

・とても挑戦的な制度、世界に対しても発信していくべき。

・指標を作る際、一般的な公共事業と同じではない指標を見つけていくことが大切。例えば、アートと福祉が交差する取組みにおいて全国的に見ても良い指標が無くてどこも困っていて、私達が（誰かが）作っていく必要がある。それは今回のような特性を持った現場から生まれる。そうすれば、事業のための評価となり説明のための評価にならずに済む。評価を余計な仕事と思わず、自分たちのために、となる。二年目以降に期待したい。

・優れた文化芸術に触れるべきだと言うのは簡単だが、実際にはさまざまな理由から、文化芸術に触れる機会がそもそも限られている人たちも多い。触れる機会がないから、親密さを感じることもなく、それゆえ近寄りがたいもの、不必要なものとの認識も生まれてくる。こうした現実と正面から向き合い、負のループを断ち切ろうとしたのが今回の助成制度であり、その志を高く評価したい。

・特筆すべきなのは、選考から実施、報告に至る一連のプロセスそのものの変化だ。普通、助成するもの、されるもの、さらには審査するもの、評価するものは、その役割を純化しようとして、紋切り型の対応でことを進めがちになる。今回は「モニタリング会議」の定期的な開催が良い例だが、大きな目的に向けて関係者が紋切り型の役割を超えて創造的に協働している。その結果、各プロジェクトは当初の「計画」通りに終わることなく、ちょうど生き物たちの振る舞いのように、予期せぬ展開と成長を続けていったのだろう。その過程は極めて示唆に富み、重要である。

・地域に近づけば近づくほど、ゲリラ的なイベントは難しくなる。地域との信頼関係づくりに費やす時間を見込む必要があり、4つのプログラムはこれまでの関係性の深さで準備において差が出てしまった。仮に地域との関わりが成功の要件とするならば、制度も審査も考え直さなければならない。

・先に仮説と目的を設定することで、取り組み自体が客体視されるという経験は、実施団体にとっても初めての経験ではないか。予定通りいかなくなるケースへのフォローが課題。

・予期しなかった展開や出会いという事が指摘されていたが、それをアピールした方が良い。通常であれば計画通りに行かなかったことは報告されないが、今回の場合はむしろ発展のプロセスが大事。そのことを積極的に言語化したり、画像で保存したり、指標に反映させることを推奨すれば、文化事業に投資する意味が行政にも伝わるし、文化は面白いと理解してもらえるようになるのではないか。

・実施団体にとってスケジュールが非常に厳しい。制度側は、もっと実施団体のために余裕のある設計をしなくてはならない。

審査員：芹沢高志（P3 art and environment代表） 中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院 准教授） 藤岡泰寛（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 准教授） 菅原幸子（横浜能楽堂支配人）

©YokohamArtLife

4 今後の展望・提言 ～まとめ

今回の制度は、都心臨海部ではなく郊外の地域に出ていく挑戦でした。そういう意味で、郊外の地域で実施するときの意義やヒントは何かと、都心と郊外地域の関係を考えたときに、これを深めていく必要があります。場所性以外の社会的な事も考慮しますと、暮らしやすい場所、皆と過ごしやすい場所、自分を表現しやすい場所、そういう視点で捉えていくと、評価できる取組がたくさんあります。それらを観察していくことで、アートとの親和性を考えることができます。今年度の実践で様々なことが見えてきたので、次年度に向けて良い部分は再度挑戦し、改善が必要な部分は変化させていくことが大切となります。

〈今年度実施して得られた気づき〉

■単体の活動支援よりも、中長期的な基盤強化のための活動支援が重要

成果の可視先行と、評価をツールとした対話の重視と証左の積み上げによって、事務局・各実施団体双方が、活動に対する様々な気付きを得られました。その気づきとは、主に、芸術文化活動の基盤強化の重要性でした。

■対話の手法への学び

当初モニタリング会議は、事務局側で定めた共通指標を実現するための情報提供と振り返りの場として始めましたが、実施団体の意見を受けて「指標を共に考える場」へと、変化していきました。「評価は一方通行であってはならない」という気づきを事務局側にもたらし、双方向で行う評価の価値を制度全体にもたらしました。

〈来年度に向けての展望〉

■芸術×○○、重なりあう部分を評価していく指標の工夫と開発

一般的な行政関連の指標ではなく、これまでにない新しい指標の開発に挑戦します。

■都心部と郊外部、公共空間活用の違いを追求

活動報告から「公共空間活用」について、都心部と郊外では優先順位やそこで生み出される価値の違いが見て取れます。その土地ならではものを問い解くことで横浜の新たな可能性を見つけられように、地域の環境を勘案した評価軸の策定が重要となります。

■制度運営のスケジュールの見直し

地域とのつながりをもっと強くしたり、横浜ならではの環境、公共空間をもっと生かしていくためには季節感が大切になります。準備に十分な時間が取れ、屋外で適切な季節に実施できるよう計画するためにも、年間通じて活動ができるスケジュールで制度運営できるよう検討していきます。

©YokohamArtLife

参考

実施スケジュール

公募期間
2019年5月16日(木)～7月1日(月)

説明会
・1回目 5月25日(土) 11:00～13:00 会場:市民フロア・ミーティングルームA(横浜そごう9階)
・2回目 6月 8日(土) 18:00～20:00 会場:戸塚区総合庁舎3階多目的スペース(大B)
・3回目 6月14日(金) 18:00～20:00 会場:公益財団法人横浜市芸術文化振興財団会議室(産業貿易センター9階)

審査会
(二次審査プレゼンテーションを公開で実施)
・一次審査(書類審査) 7月12日(金) ＊通過10件
・二次審査プレゼンテーション(面談審査) 7月22日(月)13:00～16:30
会場:産業貿易センタービル8階 横浜商工会議所805会議室 ＊審査会にて、10件の中から最終4件を採択
開催支援額:ザ・ダークルーム・インターナショナル:700万円 スタジオゲンクマガイ:1,500万円
ヒューマンフェローシップ:500万円 YOKOHAMA AIR ACT実行委員会:500万円

モニタリング会議
・第1回 8月23日(金) ・第2回 9月25日(水) ・第3回＊ 10月15日(火)、10月18日(金)
・第4回 12月11日(水) ・第5回 2020年2月19日(水) (全5回開催)
＊第3回のモニタリング会議は個別で実施したため、二日間に別れて実施

報告会
2020年3月13日(金) 14:00～17:00
(当初公開の予定だったが、新型コロナウィルスの影響で非公開、オンラインのビデオ会議で実施された)

©YokohamArtLife

事務局後記

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団は、横浜市の芸術文化を総合的に振興することにより、横浜独自の魅力ある都市創造のための社会基盤の整備を推進し、もって創造性豊かで潤いと活力に満ちた市民生活の実現に寄与することを目的としています。

本制度は、横浜市文化観光局と共に、横浜市芸術文化振興財団広報・ACYグループ内のアーツコミッション・ヨコハマ（ACY）が担当しました。ACYは、これまで文化芸術創造都市・横浜施策の振興のために様々な助成制度を設計運営してきた部署で、その経験の蓄積から芸術文化の助成交付の評価に関する知見を有しています。今回の「YokohamArtLife」の設計にあたっては、特に「創造都市」で培ってきた「まちづくり」の経験、クリエイティブ・インクルージョン活動助成という社会包摂に関する制度を2016年度から運営している経験を活かしています。あわせて、2018年度に実施したクリエイティブ・スコットランドとの英国交流で学んだ芸術文化施策におけるEDI（Equalities, Diversity, Inclusion）の考え方も取りこんでいます。

ACYは、活動のスローガンとして「芸術と社会をつなぐ」という表現を使っています。これは一見、本来社会の一環にある芸術に対して「芸術と社会」と分けて言語化することで、まるでそれが別々のものという印象を与えるように思いますが、実際の考え方は逆で芸術文化活動を社会の一環として捉えていきたいからこそ使用している言葉となります。

ACYは現代芸術や、社会包摂に関する取組みの支援など、アーティスト個人の表現を先鋭化していく活動支援の実績が豊富です。ここでは、アーティスト個人の変化をつぶさに観察し評価していくことで、社会における個人の表現の可能性、公共性について考え、そこに自治体が取り組む価値や、制度の意義を説明しています。P7で示したように、芸術活動における表現の自由の意義を広く社会に伝えていくには、芸術を先鋭化させていく取り組みと同時に、社会に芸術を広げていく取り組みの循環が大切です。その両面を社会制度にしていくのが、ACYの具体的な行動です。私たちは「社会課題解決のために芸術文化を活用する」のではなく「芸術文化制度が持つ課題の解決を進めることで社会の一環としての芸術文化が広がり、結果として社会に変化がもたらされる」ことを目指しており、それが「芸術と社会をつなぐ」に込めた思いです。

その実現に向け、「YokohamArtLife」では、発想の転換をしています。どのように芸術の本質、普遍的な価値を社会の一環として共有していくのか、私たちは、前述にあるような「個人の芸術」に加えて、「社会の芸術」を文化的な制度として広げるよう計画しました。“制度のための制度”では、意味がありませんので、具体的な成果として市民の芸術文化体験を増やすことを開発しています。

芸術文化施策は制度として、既に劇場や美術館、音楽堂、芸術祭などの仕組みを有しています。これらは、個人の表現の追究、芸術の先鋭化や研究のみならず、美術教育や演劇教育、音楽教育などを通して、一人一人が芸術への学びを深め、成熟した社会を形成していく目的で設置されています。これらは、長い時間をかけて醸成されていくもので、積み上げによって社会の変化を促していくものです。ただし、その場で体験する人の数には限りがあり、何度も深く学んでいく数はさらに限られてしまいます。また、横浜市には、アーティストが学校を訪れたり、コンサートホールや美術館を授業の一環で訪れることができる仕組みがあります。これらは芸術文化への入口として十分な役割を担っている制度ですが、公平性を担保していく過程で、短期的で一度限りという特徴があります。そのため、家から場所が遠かったり、何度も足を運ぶ際にチケット代金が重荷となったり、元より関心が低い人は、生活の一環として芸術文化体験を継続しにくい構造になっています。また、それらの多くは芸術の“提供者と参加者”というように出し手、受け手と関係が二分化されがちです。

「YokohamArtLife」は、これら既存の制度を引き算するのではなく、掛け算することで新たな価値を創出することを試みました。個人や地域の持つ力に注目し、そこに芸術を展開する際に、芸術文化制度側が持つ課題（障害）、即ち物理的障壁（移動や経済的に困難ある等）や精神的障壁（関心の低さ等）を取り除き、誰もが身近で気軽な環境で芸術文化の体験をしたり、自己の表現に向き合ったりする機会を増やすことを目指しています。その結果は、この報告書のとおりですが、試みとして設計の段階で「成果の可視先行」、「評価をツールとした対話の重視と証左の積み上げ」、「地域ランドマーク」という新たな仕組みで構成したことが功を奏し、既存の制度とは異なる新しい価値を芸術文化施策にもたらすことができたと考えています。

このプログラムは、本取組みを深く理解してくださった方のおかげで成功することができました。実施の各団体を筆頭に、創作や発表をしてくださった表現者、それを支えてくださった地域の方々と横浜市の各区役所職員、専門的な知見を提供してくださった審査員とケイスリー株式会社の皆様に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。これからも芸術や地域を深く学ぶことで、人と人をつなぐ良きパートナーとなれるよう各種プログラムを推進していきますので、変わらぬご理解、ご支援の程を宜しくお願い申し上げます。

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団　広報・ACYグループ

©YokohamArtLife

ヨコハマートライフ・芸術創造特別支援事業

2019年度 芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム

「YokohamArtLife（ヨコハマートライフ）」報告書

横浜市、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

発行・編集	公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
評価設計アドバイザー	ケイスリー株式会社
協力	NPO法人ザ・ダークルーム・インターナショナル、株式会社スタジオゲンクマガイ、NPO法人ヒューマンフェローシップ、YOKOHAMA AIR ACT実行委員会
デザイン	fita（山﨑真実）

発行月：2020年3月